女子新讀本

巻九

375.9
Hi19
資料室

42229
教科書文庫
4
810
42-1926
200030
1730

資料室
32959
Hi19

文部省檢定濟
高等女學校國語科教科書　大正十五年十二月二十一日

東京帝國大學助教授　文學士　久松潛一編

女子新讀本

東京　至文堂

東京中等教科書協會
廣島大學圖書館
35908

女子新讀本　卷九

目次

一　善と惡……阿部次郎……一
二　聖德太子……姉崎正治……二
三　詩人西行……土居光知……二四
四　元弘二年……（增鏡）……三〇
五　山嶽美論……吉江孤雁……三七
六　蕪村以後（俳句）……四三
七　俳句解……木村架空……四四

八　六月の雲雀（韻文）……白鳥省吾…五四
七　讀書……永井荷風…五六
一〇　方丈記抄……（鴨長明）……
（一）世の不思議……六〇
（二）假の庵……七一
一一　石彫獅子の賦（韻文）……薄田泣菫…七七
一三　芭蕉の行脚掟の精神（一）……太田水穂…八七
一三　芭蕉の行脚掟の精神（二）……太田水穂…九五
一四　夕暮の春……春山武松…一〇七
一五　櫻川（謠曲）……一一二
一六　創作論……厨川白村…一二五

一七　白村を憶ふ……谷本富…一二九
一八　忙中の閑……與謝野晶子…一三七
一九　對話……藤村作…一四四

目次終

帝國大學圖書之印

女子新讀本　卷九

文學士　久松潛一編

一　善と惡

（ある年少の友のために）

凡ての人には善心と惡心とがある、世界には純惡の人が存在しないと等しく純善の人も亦存在しない――これは改めて言ふまでもない凡常な眞理である。我等は固よりこの自然主義的眞理に就いて抗議すべき多くのものを持つてゐない。併しこの一つの眞理は、我等の善惡に關する

考案の全局に對してどれほどの意義を持つてゐるか。我等は我等の實際生活の上に、この一つの眞理からどれだけの結論を導いて來ることが出來るか。自分は、この點に就いて明瞭な意識を缺いてゐるために、この自明の眞理によつて却つて恐る可き誤謬に導かれた多くの人を見た。故に自分は此等の人々のために、この一つの眞理から正當に導き得べき結論と、正當に導き得可からざる結論とを區別せむとする慾望を感ぜずにはゐられない。

正當に導き得可からざる結論から始めれば、第一に我等はこの一つの眞理を根據として、善惡無差別を主張することは出來ない。一人の人格の中に善もあり惡もあるといふ言葉は、既に善惡の差別を豫想するものである。善惡の差別を豫想せずに、人性に於ける善惡の混淆を云々するは無意味である。故に凡ての人に善心と惡心とがあると云ふ一つの事實は、惡を去り善に就かねばならぬと云ふ良心の負荷を輕減する理由とはならない。寧ろ人性は善惡の混淆なるが故に、惡を去り善に就く義務は一層痛切を加へるのである。

第二に我等はこの一つの眞理を根據として、善人・惡人無差別を主張することも亦出來ない。人性が善惡の混淆であると云ふ事實は、言ふまでもなくその間に、より善いものとより惡いものとの差別があることを否定するものでも

なく、又人がより善くなりより惡しくなることが出來るといふ事實を否定するものでもない。人には、その素質上既に善人と惡人との比較的差別がある。而も後の條件を考慮の中に入れる時、我等は更に善に向ふ心と惡に向ふ心と、その方向の上に截然たる對立を認めずにはゐられない。假令二人の人がその素質に於て同等であり、その善惡混淆の度に於て等量であると假定しても、その志すところの相違によつて、全然反對の方向をとることも亦あり得るのである。故に我等はその意志の所在により、その努力の方向により、その人格生活の焦點によつて、善人と惡人との間に隨分本質的な境界を劃することも亦出來る筈である。茲

に二人の人があつて、共に同樣の罪過を犯し、共に同樣の過誤を重ねることがあるとしても、人を恥づると恥ぢざると、其の過を改めむとすると其の非を遂げむとすると、この兩樣の態度の差別によつて人格の善惡を判ずることは決して不可能のことではない。故に我等は凡ての人に善心と惡心とがあるといふ事實を根據として、善人と惡人との差別を破壞することも亦出來ない。カント以來言ひ古されたやうに、善人とは善き意志である。善き意志によつてその素質の惡を淨煉し、善に向ふ努力によつて善に協ふ本質を獲得したものである。之に反して、惡人とは惡しき意志である。その無恥なる惡の主張によつて、素質の惡を更に

倍加し行くものである。茲に同一の空間を相前後して經過する二つの矢があつても、その方向が相反對するとき、その運命も亦全然相反せずにはゐられない。善人と惡人との差別は此の如きものである。

此の如く、善惡の差別を廢し、善人・惡人の區別を棄て、善の主張を無意義にし、惡に甘んずることを敎へることが、善惡混淆の人性觀から正當に導き得べき結論でないとすれば、この一つの眞理が我等の實際生活上に、正當に與へ得べき結論は何であるか。それは第一に、自己の善を輕信することの警戒である。惡は我等の素質の奥に深くその根を卸して容易に刈除することが出來ない。善良な動機から出

た善良な行爲さへ、微細にこれを解剖すれば惡しき動機とからみ合つてゐる。善き人となることは如何に稀有であるか。我等は根柢から淨めらるることは如何に難きか。深くこの事を意識して、自らい〻氣になることを戒めなければならない。

第二にそれは他人に對する寬容を敎へる。世に純善の人がないとすれば、我等は輕々しく他人に絶對善を要求す可きではない。さうして世に純惡の人がないとすれば、我等は凶惡無慚の徒の中にも猶本性の善を認めて、これを助成することを努めなければならぬ。我等は我等自身が決して純善の人でないことを記憶して、他人に善を責めるに

も猶身の程を忘れぬやうにしなければならない。我等が凡ての人に善心と惡心とがあるといふ事實から、最初にひき出さなければならぬものは、「我等のうち罪なきもの先づその女を打て。」といふ基督の誡である。

要するに、我等がこの一つの眞理から導き出すことが出來るものは、自己の善を輕信しないと云ふ意味に於ても、他人の罪過を無慈悲に責めないと云ふ意味に於ても、共に最も直接にパリサイの徒に當るものである。然るに、無恥なるパリサイの徒は、彼等とは正反對の位置に立つこの一つの眞理を、僭越にも却つて自己防禦の用に供する。彼等は、この眞理によつて自己反省と他人に對する寛容とを學ぶことを知らざる彼等は、唯自己の不善を責めらるゝとき、その不善を辯護するために、世には純善の人がないといふことを持つて來るのである。併しこのやうな自己辯護が、彼の人格に就いて如何なる證明を與へることになるか、落着いてその意味を省思すれば、彼等と雖も赤面することを禁じ得ないであらう。他人の不善を口實にして自己の不善に甘んじてゐることが出來るほど輕薄であるか、世間の前に不當に自己を正しく見せむとする虛榮心に驅られて、眞實の前に潔く頭を垂れることが出來ないほどに浮誇であるか—三つのうちの孰れかでなければ、この恥づべき自己辯護を公言することが出來る筈がない。

「彼は他を責めること嚴酷に過ぎる。」といふ非難に對する正當の自己辯護は、「自分は嚴酷に他人を非難する資格があるほどに正しい。」といふことでなければならぬ。さうして、「汝は不善である。」といふ非難に對する正當なる自己辯護は、「否余は不善ではない。」といふ主張ばかりである。世に純善の人がないことを理由として自己の不善を辯護するは、要するに逃げながら吠える犬のさもしさに過ぎない。殊に、他を難ずるとき、「余はこれを敢へてして恥づるところなき正義の士である。」と揚言したものが、逆に自己の不善を責めらるゝ時、世に純善の人がないことを以て遁辭をするが如きは、實にさもしさの最も近づく可からざるものである。

重ねて年少諸友に告ぐ、—「汝等パリサイ人の麵麭種を慎め。」

（阿部次郎*）

*文學士
哲學者
東北大學教授

二　聖德太子

聖德太子攝政の三十年間は、あらゆる方面に於て日本文明の轉進時代であつた。內治・外交・文物・思想の進歩は、實に太子の指導・感化に依つて、此の間に大半成就したのである。太子の事蹟は多方面であるが、要するに精神的理想中心となり、基礎となりて、其の應用が內外萬般の政治施設に現れたのである。今極めて見易い一事實を以て、太子の經營と其の理想の一端を說明しよう。

大阪の東部丘上に在る四天王寺は太子が攝政の初年に建てられた寺である。寺と云つても後世の如く單に禮拜・儀式の場ではなく、社會經營の規模を具へた大道場であつた。即ち其の中心たる敬田院には金堂・五重塔などがあつて、禮拜の場所であると共に、佛典・漢籍の研究は勿論、天文・音樂・工藝等の修業所であつた。其

聖德太子御像

の學問・藝術の系統は足利時代まで隆盛に繼續し、舞樂の如きは今日まで傳はつてゐる。

現在の大阪四天王寺

悲田院は今日の養育院で、救のない人民特に老人・孤獨を養ふ場所であつた。施藥院は醫藥の製造所又頒布所で、弘く人民に藥品を與へ、療病院は讀んで字の如く病院で、博く施療をした。此の四院から四天王寺は成立し、其の殿堂は美術と建築とに於て

當時の儀表であつた。かくして、四天王寺は當時に在つて日本佛教最大の道場であり太子が社會經營の源泉であつた。

啻にこれのみならず、四天王寺の位置に重大の意義があつた。卽ち當時の皇居は大和小治田に在つたが、支那・朝鮮などから來る船は難波の津に着いて、人は其處から京に入ることになつてゐた。四天王寺は實に此の港の埠頭に建てられたのである。今日に在つては埠頭には稅關や檢疫所を置くが、其の代りに莊嚴なる寺院が屹立してゐたわけである。西門は港の表、西方に向ひ、鳥居は濱邊の上陸地に在つた。此の如くして、外國から來る使臣・僧侶・學者・歸化民・

旅客は皆長い航海を經て此處に上陸して、管絃樂に迎へられ、僧侶・式部官の行列と共に、靜々と此の西門を入り、東山に上る日を拜し、金堂の儀式に參して、更に大和の京に行くのであつた。

かくいへば何でもないやうに聞えようが、今日世界の何れの文明國で、此の如き高尙な精神を含んだ港を設備してゐる國があるか。而して此の有形の設備は、實に太子が佛敎から感得された一乘開會――一切人類を最高の理想に引入れ、萬世に亘つて不變の公道に進ましめる――の主義を形に現したものであつた。內に對しては、人民の精神的敎育と社會救濟の事業を擧げる機關であつた此の四天王

寺は、世界に對しては、日本國の此の高遠なる理想を示す設備であつた。

一乘開會の根本理想から出た太子の政治に就いて、最も大切なのは、今までの氏族割據の狀態を打破して、王政の統一を遂げるにあり、其の主義は攝政第十二年に發布された憲法第十二條にある。「國に二君なく、民に兩主なく、率土の兆民王を以て主となす」といふので、內にあつては氏族間の黨爭を制し、總べての土地・人民を皇室の直屬とする方に步を進め、又それと共に朝廷の威嚴を高める爲に、位冠の制を創め、朝臣をして道德的に信仰あり、主義ある人として、政に參與せしむるにあつた。且又、池を掘り、道を開いては、人民

生活の幸福を增し、醫藥を以て疾苦を救ひ、曆法を以て時を定め、美術・工藝を以て人心を美はしくするのも、皆一乘開會の實行であつた。外に向つては、朝鮮諸國に對して恩威併び行ふ政策を執り、特に日本の權臣が彼の地で利害相爭ふ弊を匡し、且又、必要に備へる爲に兵備をも修められた。かくて朝鮮問題の處置が了つた後には、直接に使臣を新興の支那隋の朝廷に派し、「東天皇敬んで西皇帝に白す」と宣うて、對等の國交を開かれた。此は單に國交上の辭令でなく、佛法卽ち宇宙の眞理の前には東西皆平等であるといふ太子の理想から出たことである。

太子は又、一國が國として成立つ以上、其の歷史が具つて

ゐる必要を認めて、古傳・口碑・地方傳說などを集められた。其の結果は攝政第二十八年に天皇紀・國紀・國造紀等の編纂となつて現れ、一國全體の歷史と共に、各氏族や地方の記錄も完備するに至つた。此等の記錄は後に燒けて亡びたが、後百年を經て、古事記・日本書紀などが出來て、日本歷史の古傳を今日に傳へ得たのは、實に太子の修史事業が其の源を開き基礎を据ゑた爲である。

太子攝政十年の間に、內治・外交共に其の緒に就くに及んで、十一年位冠の制を定められて、十二年には有名な十七條憲法を制定せられた。

此の憲法の大趣旨は、要するに國政・治民萬般のこと皆道

德精神を大本とするにある。此の主義を簡單にいへば、其の第一條に在るが如く、和卽ち精神的協同を以て基礎とし、此の精神的和合の實を擧ぐるに、第二條にあるが如く、三寶の崇敬を規範とするのである。三寶といふのは佛・法・僧の三つであるが、これは木像の佛、經卷の法、圓顱の僧侶を指すだけでなく、今日の言葉でいへば、人格と眞理と團體との結合をいふのである。此の意は太子の著、勝鬘經義疏に一體三寶の理として說明してある。其の要は下の通りである。

凡そ物あれば、則あり、國にしても、家にしても、其の存立には存立の眞理(卽ち法)・精神・主義・理想がある。但し眞理はそれ自體では抽象の理であるが、それを悟得し體現して、此に依

つて他人を指導し、感化し、又支配する人格(卽ち佛)があつて、始めて事實に活きる。宇宙にあつては佛、國にあつては君、家にあつては父が卽ち此の如き法を表現する人格である。そこで此の如き人格の下に和合・團結して、其の眞理を奉じ、教に順ひ、理想を發揚するに、同心・協力して、眞理を世に發揚し、繼承し、流行せしむる民衆の團結(卽ち僧伽)があるべきである。宇宙にあつては佛道の理想を發揮する衆生、國にあつては王政を翼贊する民、家にあつては父の意を奉じ家運を興す家族が此である。眞理と人格と團結と、此の三者の一致結合が卽ち一體三寶の理想であつて、太子の事業は皆此の理想・主義を發揚するにあつた。內治・外交の措置から、

佛教の興隆、制度の整理、學術・美術の奬勵、殖產興業の努力、皆此の根本精神から出てゐる。今日の法律家の間には十七條憲法は法律でないといふ說があるが、實に此の如き道德精神を基礎とした法律であり、日本最初の憲法であつた。

此の如く、太子は政治家であつたが、其の政治は道德理想の表現であつた。卽ち太子は佛教の信仰を基とし、日本國の王政を主義として、人民全般の精神的啓發、文明・文物の進取を實行した政治家・指導者・宗教家であつた。而して其の主義・精神・信仰・理想は單に政治家としての手段でなく、太子自らの眞心から出たものであつた。それ故に太子は憲法に依つて朝臣・國民を指導せられた外に又自ら講師として

佛教を講じ、其の主義・精神を當時に示し後世に遺された。其の講ぜられた經典は一乘開會の根本義を明らかにした法華經と、女王婦人が佛道に進む典範を示した勝鬘經(其の主人公たる勝鬘夫人を推古帝に擬して)と、公民指導者の典型たる維摩經(其の主人公たる維摩居士を自身に擬して)と、此の三つであつた。　要するに、太子の趣意は、一體三寶・一乘開會の理想を、日本國家の生命に體現し、國民の生活に實行するにあつたのである。

主義あり材幹ある政治家、理想と實行とを兼ね具へた宗教家、見識あり洞察ある理想家、而して又社會事業の指導者、美術の保護者、修史の開拓者、此の如きものこれ聖德太子の人格である。其の生時にあつては、法王と仰がれ、聖德王と稱せられ、觀音の化身と信ぜられ、後世からは日本文明の大恩人と萬世に仰がれ給ふも、皆當然の事である。　攝政第三十年病に臥し、諸王・諸臣の熱心に御平癒を祈つた甲斐なく御齡五十で薨去せられた。　當時の有樣を記して、日本書紀に次ぎの通りにある。

是の時、諸王・諸臣、及び天下の百姓悉く老いたるは愛兒を亡へるが如く、味口にあれども嘗めず、若きは慈父母を亡へるが如く、哭泣する聲行路に滿てり。　乃ち耕夫は耕すを止め、舂女は杵せず、皆云はく、「日月輝きを失ひて、天地既に崩れぬべし。　今より以後誰を恃まんや」と。

(姉崎正治*)

*嘲風と號す
宗教學者
文學博士
東京帝國大學教授

三　詩人西行

西行は自然を友として、愛すれば愛するほどさびしくなつた。そして、淋しき心に調和する淋しき自然を友として交らんとした。

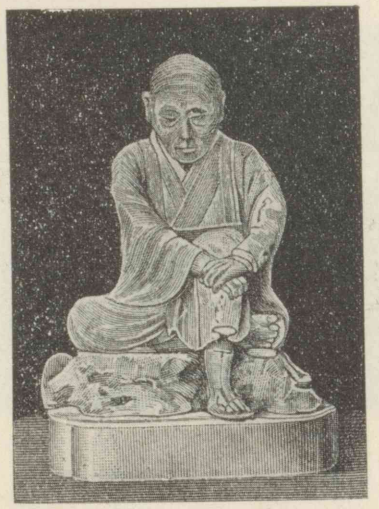
心なき身にもあはれは知られけり、
　鴫立つ澤の秋の夕暮。

おぼつかな秋はいかなる故のあれば
　すずろに物の悲しかるらむ。

何となく住まゝほしくぞ思ほゆる、
　鹿のね絶えぬ秋の山里。

訪ふ人も思ひたえたる山里の
　寂しさなくば住みうからまし。

かく彼は寂しさを友とし、その奥深くたどつて行つたのであるが、寂しさの奥には尚深刻な寂しさがあるのみで、愛の眞の歡びは見出されなかつた。


西行木像

雪ふれば野路も山路も埋もれて、
　遠近知らぬ旅の空かな。

行方なく月に心のすみ〳〵て
　果てはいかにかならむとすらむ。

風冴えて寄すればやがて氷りつゝ、
かへる波なき志賀の辛崎。

いづくにか眠り〳〵て倒れ臥さんと
思ふ悲しき道芝のつゆ。

秋深み弱るは蟲の聲のみか
聞く我とてもたのみやはある。

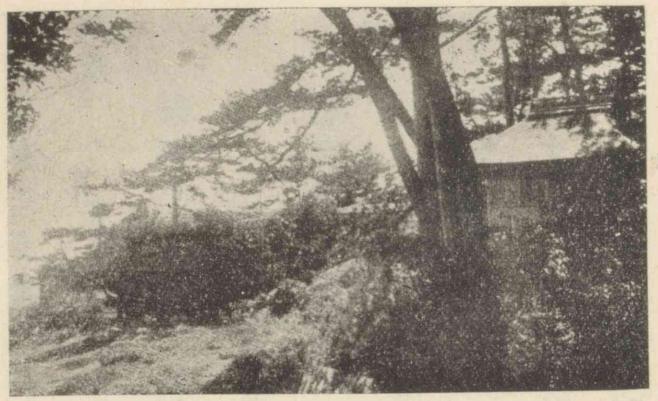
大波にひかれ出でたる心地して
助け舟なき沖にゆらるる。

かくの如く、西行は寂しさの奥へ〳〵とたどつて行つたが、これは輝く光明の道ではなかつた。それは當時の時代思潮に於て、人間性の愛と自然の愛とは相對立するものであつて、自然の愛は心情の願の否定であつたからである。西行はこの寂しさにたへかねて、また『人』をなつかしく思つた。

淋しさにたへたる人はまたもあれな、
庵並べむ冬の山里。

花も枯れ紅葉も散りぬ山里は
淋しさをまた訪ふ人もかな。

かへりゆく人の心を思ふにも
離れがたきは都なりけり。



鳴立澤

しかし、當時の厭世觀のうちに育ち、それを超越することのできなかつた彼は人間の愛に歸つてゆくことができなかつた。

わだの原遙に波をへだて來て
都に出でし月を見るかな。
吉野山やがて出でじとおもふ身も
花散りなばと人やまつらむ。

かくて、彼はまばゆき光明にも、大なる歡喜にも力強い信仰にも接することなく、未來に對する淡い希望と、自然の寂しい慰藉とのうちに生を終へたのである。

入日さす山のあなたは知らねども、

心はかねて送り置きつる。
はかなしや仇に命の露消えて
野邊に我が身の送りおかれむ。
越えぬればまたも此の世に歸りこぬ
死出の山こそ悲しかりけれ。
諸共に我をも具して散りね花
うき世を厭ふ心ある身ぞ。
願はくは花の下にて春死なむ、
そのきさらぎの望月の頃。

西行の偉大なる點は、厭世・脫俗の態度を誇示し瘦我慢をすることなく、かゝる自然の愛によつて慰められずして、『人間』

を慕ひ、何物かを眞に愛しなければゐられなかつた點に、心の奥底から寂しがつた點にある。これは安價な愛なきさとりに安住し、寂しさを弄び、茶化したり、洒落でごまかしたりする人達とは比較にもならぬ。さびしがるといふことは、愛せずにはゐられない詩人の運命である。（*土居光知）

*文學士
英文學者
東北帝國大學教授

四　元弘二年

元弘二年の春にもなりぬ。新しき御代の年の初には、思ひなしさへ花やかなり。上も若う清らにおはしませば、萬にめでたく、百敷の内何事も變らず。さるべき公事の折々、さらでも院・内同じ陣の中なれば、一つに立ちこみたる馬車、隙なく賑はしけれど、見し世の人は一人も交ろはず。參りまかんづる顔のみぞ變れる。

*御門は未だ六波羅におはします。二月の頃、空の景色のどやかに霞み渡りて、緩らかに吹く春風に軒の梅懷かしく薫り來て、鶯の聲麗かなるも、憂はしき御心ちには物憂かる音にのみ聞召しなさる。異やうなれど、かの上陽人の宮の中思ひよそへらる。長き日影もいとど暮らし難き御慰めにとや聞え給ひけん、中宮より御琵琶奉らせ給ふ序に、いさかなる物の端に、

*後醍醐天皇

*唐の玄宗皇帝の妃

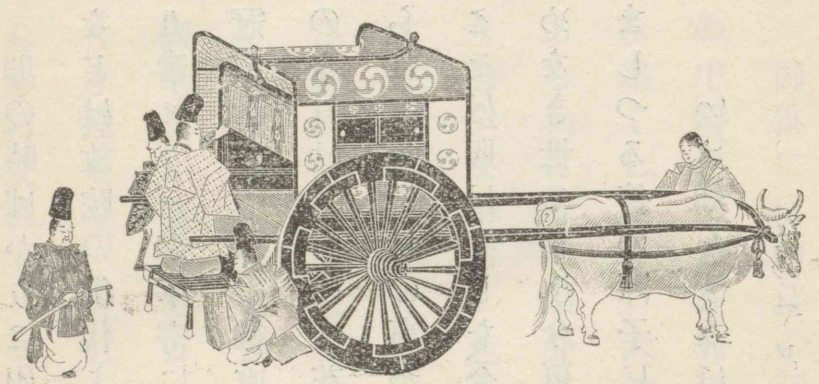
思ひやれ、塵のみ積る四つの緒に
掃ひもあへずかゝる涙を。

げにと思しやるに、いと悲しくて、玉水の流るゝやうになん。御かへし、

かきたてしねをたち果てて君戀ふる

涙の玉の緒とぞなりける。

かの承久の例にとや、東より御使には長井の右馬助高冬といふものなるべし。これは頼朝の大將の時より、鎌倉に重き武士にて、未だ若けれども、かゝる大事にも上せけるとぞ申しける。終に隱岐國へ移し奉るべしとて、三月の初の七日京を出でさせ給ふ。今はと聞召す御心まどひども、言へば更なり、所々の歎き、近う仕りし人々の心ども、おき所なく悲し。御門も限りなく御心惱むべし。いとかうしも



網代車

人に見えじと、且は思し鎭むれど、あやにくに進み出づる御涙を、もて隱しつゝおはします。古りにし事を思し出づるにも、立ち反り、また世を安く思さん事のいと難ければ、萬今をとぢめにこそと思しめぐらすに、人やりならず、口をしき契加はりける前の世のみぞ盡きせず恨めしき。つひにかく沈み果つべき報あらば、上なき身とはなに生れけん。

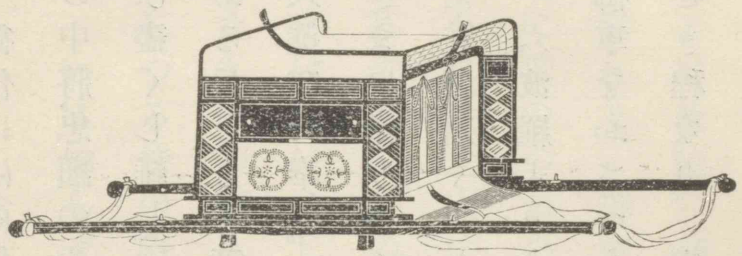
卯の時ばかりに出でさせ給ふ。網代の御車に御前どもなどは、故院の御代より仕う奉り慣れにしものども、ある限り參れり。御車寄に西園寺中納言公重侍ひ給ふ。上は御冠に世のつねの御直衣・指貫、白綾の御衣一襲奉れり。去年の今日は北山にて花の宴せさせ給ひしも、哀れに思し出でられて、その日の事かき連ね戀ひしく思さる。人々の祿にこそは賜はせしを、今日は御旅衣にたちかふるも、哀れに定めなき世の習ひ、今更心憂し。御車に奉るとて、日頃おはしましつる傍の障子に書附けさせ給ふ。

いさ知らず、なほ憂き方のまたもあらば、
このやどとても偲ばれやせん。

御供には内侍の三位殿・大納言君・小宰相など、男には行房の中將、忠顯の少將ばかり仕る。己がじし京の名殘ども言ひ盡くし難し。六波羅よりの御送りの武士、さならでも名ある兵ども、千葉介貞胤を始めとして、おぼえ異なる限り十人選びて奉る。色々の綾錦の水干・直垂などいふもの、さまざまに織り盡くし染め盡くして、いみじき清らを好み調へたれば、斯くてしも世に珍しき見物なり。

六波羅より七條を西へ、大宮を南へ折れて、東寺の門前に御車をおさへらる。とばかり御念誦あるべし。物見車所せき程なり。宜しき女房も壺裝束などして、かちのものどもも打交れり。さらでも、老いたるも、尼法師、あやしき山が

つまで立ちこみたるさま、竹の林に異ならず。各目押拭ひ、鼻啜りあへる氣色ども、實にうき世のきはめは今に盡くしつる心地ぞする。崇德院の讃岐におはしましけん程の有樣、後鳥羽院の隱岐に移らせ給ひけん時なども、さこそはありけめなれど、音にのみ聞きて、見ねば知らず、これを始めたる心地ぞする。日頃は何の御にほひにも觸れず數ならぬ人、及ばぬ身までも、今日の御別れの哀れさ、なべておき所なげにぞ惑ひあへるかし。



車　輿

君も御簾少しかきやりて、このもかのも御覽じ渡しつゝ、御目とまらぬ草木もあるまじかめり。岩木ならねば、武士の鎧の袖どももしほどけげにぞ見ゆる。京の梢を隱るゝまで御覽じ送るも、猶夢かとおぼゆ。鳥羽殿におはしまし着きて御粧更め、破子などまゐらせけれど、氣色ばかりにてまゐらず。是より御輿に奉れば、留まるべき御前どもの空しき御車を泣く〳〵遣り歸るとて、くれ惑ひたるけしきいと堪へ難げなり。

（增鏡）

五　山嶽美論

海洋は、廣さと、自由と、伸々しさと、同時に動と靜との感じ、

靜寂と叫喚、動亂と平穩との美を具へ、森林は集合生活・團體生活・複雜多樣・混淆秩序などの一種複合の美を見せ、山嶽は立體的・彫刻的線の美、面の美を盛り上げて動ぜざる姿を示す。海洋が物の成し遂げられた美を見するといふべきものならば、山嶽は物の始まり・源泉・動力の美を示すといふべきものである。

山嶽には一種の深い靜けさと、同時にその靜けさの中から起る不思議な音樂と、また平地では見られない、純な、澄み切つた色彩の變化と、それ等を綜合し統一した、全體的な、大觀的な總べてを包む氣分が、殊にその頂上に於て抱かれるものである。最早仰いでも、紫の空より外には何物もない

といふ感じの中から、永遠に對する不可思議な一種の力を覺え、そして氣分は純化せられ、歸一せしめられ、超脫せしめられ、淨化せられた爽かさを味はしめられずにはゐられない。

*ユングフラウの頂上に立つものは、一種の清爽な、同時に敬虔な情に打たれる。大自然が縷彫したこの巨きな藝術は、その存在そのものが直ちに理想である。こゝに我々は理想主義と現實主義との握手を見出す。此處に我々は確かな存在性と、無限に憧るゝ情念との融合を見出す。我々の頭上を覆ふ紫紺の空は涯しなき高さを示し、我々が踏む山の頂は大地の動ぎなき確かさを見する。——ユングフラウ

*アルプス山の最高峰

の中腹には、無數の草花が、短き季節を爭つて、咲き亂れてゐた。氷河を隔てた日當りのよい草原には、鈴の音を鳴らしながら、牛の群がさまよつてゐた。登山鐵道の軌道は、八月の日光にも消え殘つてゐる雪の間を縫つて、隧道をくぐり、溪の上を傳はつて、次第に頂上へ導いて行つた。——雪に輝く尖頭と氷に埋められた溪谷と、麓の村々と、山の裾をめぐる深碧の湖水と、それを緣どる常綠樹の林と、下より上へ上より下へ、眞白な雪のちぎれて飛ぶ蒼空の中へ、この麗はしくて雄々しい巨峰が、身をもつて描き出した一大彫像は、理想を現實へ、現實を理想へ示す一つの象徵として、嚴然として屹立してゐた。——私はこのユングフラウの頂上に立つた時の感じを忘れることは出來ない。時々の思ひ出となつて私の心をとりしづめてくれると同時に、私の情念をも高く放つて、淨化し洗滌してくれる。

山嶽は、人間が地上に棲息する以前から、恐らく存在して、人間が始めて目を見開いた時から、その眼前へその偉容と美裝とを輝かしてゐたことであらう。けれど、この眼前に存在する美を、或は遠く地平線上に浮かぶ美の姿を、人々は目には映ぜしめても、それを美しいとは感じなかつたらしい。或時期の來るまでは、この天地間に大きく刻み出され、築き上げられ、描き出されてゐる美も、その存在を認められず、隱されてゐたのである。その時期が來ると、俄に眼前に

眞白い山が浮かび上つた如く、富士山が一夜にして湧出した如く、人々は驚いて、爭つて、その美を仰ぎ、拜跪せずにはゐられないのである。

この時期は、歐羅巴と日本とでは、日本の方が遙かに早いであらう。萬葉集の時代から日本人は既に富士の美をうたつてゐる。けれど全體として山嶽の美觀を味はふやうになつたのは最近のことである。歐羅巴ではこの山嶽の美が一時に人間界に開放せられたのは、地上に大革命のあつた後、ロマンチシズムの文藝が始めて情緒を開いて自然を感じ初めた時、卽ち十九世紀の初頭である。

（吉江孤雁）

六　蕪村以後（俳句）

鯊釣や鼻をごめきて百とよむ。　炭太祇

犬を打つ石のさてなし冬の月。

旅人や夜寒とひ合ふねぶた聲。

春雨や物語り行く蓑と傘。　谷口蕪村

春の海ひねもすのたりのたりかな。

菜の花や月は東に日は西に。

五月雨や大河を前に家二軒。

日は斜關屋の槍に蜻蛉かな。

這へ笑へ、二つになるぞ今朝からは。　小林一茶

雀の子其處のけ其處のけお馬が通る。

あこが餅あこが餅とて並べけり。

やれ打つな蠅が手を磨る足を磨る。

大根引大根で道を教へけり。

七　俳句解

鯰得て歸る田植の男かな。

虚子氏曰く、これも田植の實況である。田植の時分には、川や沼の水を田へ引く爲に、田一面が沼のやうになる。さ

ういふ時には、鰻などが沼などから澤山田の中には入つて來る。恐らく鯰も入つて來るだらう。田植に行つた男が、其の鯰をおさへて持つて歸つたといふ事を叙したのである。

鳴雪氏曰く、滑稽趣味の有る句で、其の男が田の中で鯰をおさへたり、逃がしたりしてゐる時の有樣も想像される。

四方太氏曰く、捕る時は目には映らぬが、其の鯰を提げて歸る時の有樣は目に映る。

虚子氏曰く、予は鯰を捕る時の光景も、歸る時の光景も想像することが出來ぬ。此の句の如きは、「鯰得て歸る田植の男かな。」といふ筋書的の事實が叙してあるに過ぎぬと思

ふ。さうして其の筋書的の事實其のものに面白みがあるのだ。若し「鯰提げて」といつたら、歸る時の光景が多少目に映るであらう。

碧梧桐氏附記「鯰得て」は作者が單に鯰を田植男に配合したばかりに滿足しないで、一層其の音調を高朗ならしむるものであらう。卽ち調子を强める手段で、其の意味を穿鑿するのは、聊か音調の感じを弱めるやうになりはすまいか。

蕪村(架空氏)曰く、「得て歸る」でも「提げて歸る」でも、事實に變りはないが「得て」といはなければ、意外の獲物にありついた心持が現れない。決して音調論などの出しやばる所に

蕪村の繪

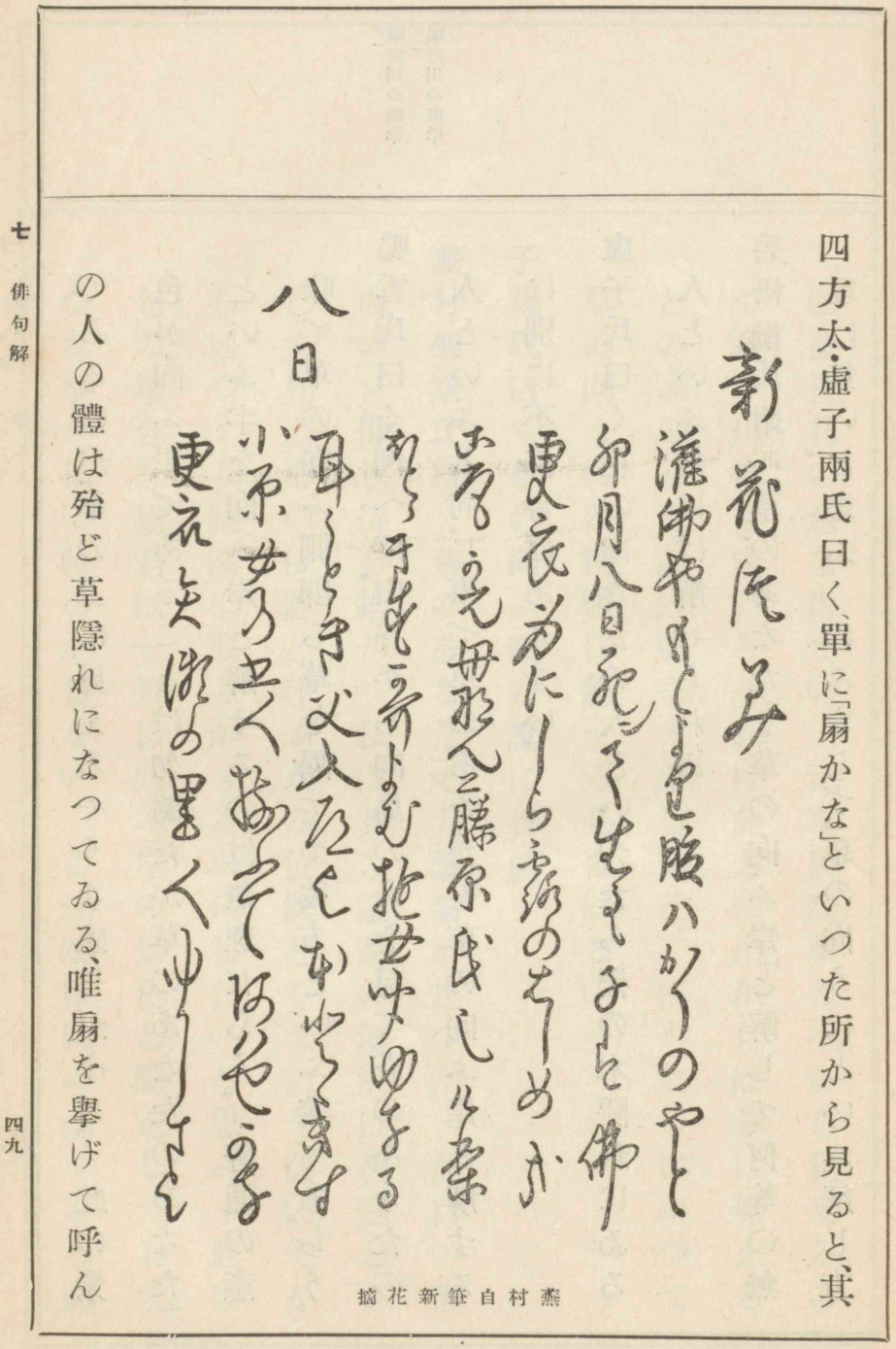
あらず。其の上「得て」の一語には、鯰を提げて歸る途すがらも、絶えず不意の所得をした喜が持續してゐる趣があるが、「提げて」とすると、鯰を得た時の喜は、既に念頭を去つて、今は唯一物を持つて歸る事となる。と、先づ「得て」の言葉にあとから意味を附けて見るやうなものの、實は「得て」は私

の慣用語であつて、其の意味よりは、寧ろ古人の口を經ぬ新語といふ方に特色があるに過ぎない。

渡し呼ぶ草のあなたの扇かな。

紅綠氏曰く、何だか言葉が轉倒してゐるやうだが、要するに、此方の岸から向うの岸を見た句で、向うの岸の草隱れに、扇を擧げて渡舟を呼んでゐる者があるといふのである。鳴雪・碧梧桐兩氏曰く、「草のあなた」といふのは、草の向ふ側卽ち草隱れといふ意味ではない。草の生えてゐる向ふ岸といふ意味だらう、草の生茂つてゐる向ふ岸で人が扇を擧げて渡舟を呼んでゐるといふのである。

四方太・虛子兩氏曰く、單に「扇かな」といつた所から見ると、其の人の體は殆ど草隱れになつてゐる、唯扇を擧げて呼ん



八日

蕪村自筆新花摘

*一 隅田川の西岸
*二 隅田川の東岸

でゐるのが、草の上に見えるやうな感じがする。此の景色が向ふ岸であることは勿論だが、草のあなたの「あなた」といふ字を向ふ岸と解するのは無理だらう。普通の意味で草の向ふ側、卽ち草を隔てて彼方といふ義であらう。

鳴雪氏曰く、例へば山谷から向島の人を見て、花のあなたの人といふと同じ事で、草のあなたを草の向ふ岸と解するに別に不都合はあるまい。

虛子氏曰く、花のあなたの人といつたら、櫻の木隱れにゐる人といふ外には解せられぬ。

碧梧桐氏附記、草のあなた」を「草の向ふ岸」と解して、何等の無理は無いと思ふ。のみならず、「草の向うに」といふ解し方は甚だ其の意を得ない。元來扇は草の中から見えるので、多少川幅も廣いとすれば、此方の岸からは草に見えるといふのみで詞は盡きてゐる筈だ。何もこゝに限つて草の向うにと精密に叙する必要はない。

子規氏曰く、草の向ふ側の說に贊成。

蕪村(架空氏)曰く、「草のあなた」で大議論が起つた。面白い、面白い。併し待ち給へ。私は其の議論の解決は後廻しとして、先づ舟の位置と、呼ぶ人の位置とをきめて置いてから、ゆつくり議論に取りかゝる事にしたいと思ふ。此の句の場合を、諸君は一齊に向ふ岸の景色と斷定してしまつた事が、私にはわからない。これは私にいはせると、向

ふ岸でもよし、此方岸でもよし、東岸・西岸・南岸・北岸、更に選ぶ所はないものだ。先づ人が渡舟を呼ぶ場合を考へて見るが早手廻しだらう。往來の少い田舍の渡場などでは、唯一艘の舟で、人を對岸へ渡すが、すぐに對岸から乘る人が無ければ、其の儘對岸に客待ちをして、空舟では此方へ戻つて來ない。そこへ又對岸へ渡るべき人が來ると、乘るべき舟が無いから、對岸に客待ちしてゐる舟を呼ぶ。呼ばれゝば空舟でも戻つて來る。これは兩岸何れでも同じ事だ。但し此の時は草のあなたなどから呼ぶ必要はない。川緣迄來てゆつくりと呼んで、向ふ岸から舟の漕ぎ戻るのを煙草でも吹かして待つてゐるのだ。又最

も客の少い渡船場では舟を岸に繫いで置いて、船頭は客の來る迄小屋で晝寢をしてゐる處もある。此の時も客が大聲で船頭を呼ぶのだが、以上の二つは此の發句の場合ではない。此の發句の場合は、今舟が多少の人を乘せて此方の岸を離れんとする時、これに乘り後れまいと駈付ける人が、一町半町の距離から、扇を高く揚げ「オーイ」と聲を發して、今乘るから待てといふ合圖をするのだ。若し川の附近が草原であれば、其の人の姿は夏草に沒して、高くさし上げた白扇と呼ぶ聲ばかりが耳と目に入るのだ。これが卽ち「渡し呼ぶ草のあなたの扇かな。」といふ景色だ。

（蕪村夢物語）

*木村架空（正三郎）著

八　六月の雲

露つぼい丘邊の朝、
その畑中の路に立ちどまり、
雲雀が啼きながらあがるのを、珍しげに私は見た。
雲雀は環のやうに旋回しながら、
翼を耀かしながらのぼる。

おゝ、この季節はづれの樂しげな無心の雲雀、
遠くいつしか土を離れて、
重い愁ひをひく私は旅人。

一望の黑土の野はすでに麥刈がすんで、
萠え出た豆や薩摩芋に手入れをしてゐる農夫たち、
私と沒交渉に點在する農夫たちの上に朝の日は溫い。

私は畑中の路を歩む、
大きい光る鍬をかついでゆく老農、
水のはいつた土瓶をさげてゆく少年、
荷車をひいてゆく少女、
遠く霞ケ浦が見え、利根川が見える、
叢には野茨の花が咲いて、
蛇は露にぬれてさはさはと草にかくれる。

私は葉のひらいた一本の蕨を折つて見る。

この丘はまるで夢幻郷のやうである。

土は豐饒らしく濃やかで黑い、

雲雀はいつまでも旋回しつゝのぼる。

私は何かに取りのこされた嘆きを感ずる。

私は見えざる神に挨拶する。

（白鳥省吾）

*詩人

九　讀　書

讀書に二義あり。一は學ばむがために讀み、一は娛まむがために讀む。一は螢雪の苦をいとはず、一は置炬燒のあ

たゝかきを好む。苦學の勸めは古文眞寶を見て知るべく、遊戯の書見は柳樽を開いて、「*顏に一冊屋根に葺き」の妙句に興ずべし。

亞米利加人は知識を讀書に求むる時、卷初の目次を檢して其の概要を摘錄し、事を知るに速ならむことを努むといふ。然るに、佛蘭西人フアゲエは、書を解する法は唯悠々として先をいそがず遲くよむに在りと言へり。兩者の是非は徒歩と車行との利害を論ずるにひとしく、伊蘇保物語の兎と龜との訓話を聞くが如し。

*うたゝ寢の顏に一冊屋根に葺き

讀書・點茶・暖酒の三事は伴侶を俟たずして獨り娛しむことを得るものなり。されば、人一たび離群索居の思に沈淪するに及びて、その興いよ〳〵深きを知るべし。人間老後の清福は貧福・成敗の別を問はず、恐らくはこの三事の右に出づるものあらざらむ。

讀書の興は樹蔭・窓前・爐邊・枕頭・車上・舟中、各その處を殊にして皆可ならざるはなし。アナトオル、フランスが自叙傳に、巴里の大都の貧しき巷にたゝずみて栗賣る翁の栗燒く香をかぎつゝ、商店の燈影をたよりに書をよみし思の長く忘れがたかりしことを記したり。これ巴里にあらざれば爲し能はず、巴里の人にあらざれば想像しがたき情景といふべし。東京市街の電車の乘客に讀書の閑を與へたりしは、わづかに布設の當初數年の間に過ぎざりけり。

我は微恙の枕上の最も讀書に可なるを覺ゆ。病痾はもとより醫を迎へて藥を服すべきほどのものにはあらず、唯風をいとひて靜臥二三夜を經なば、おのづから癒ゆべきたぐひのものをいふなり。書卷を把持する手先の夜深に及びても更に冷かなるを覺えず。枕に近く燈火を引寄せ置きても、殘る蚊の聲を聞くことなき暮秋・初冬の長き夜は、年の中にて最も病床讀書に適したる時節といふべし。窓外

には寒蛩の聲猶絲の如し。市外を通る汽車の響の遠く風かとも怪しまるゝ時、はら〳〵と檐打つ雨を聽かんか、幽邃の情趣はこゝに至つていよ〳〵窮まりなく、人をして病の身にあるを悲しむに堪なからしむべし。

（永井荷風）

*名は壯吉小說家

一〇　方丈記

(一)　世の不思議

行く川の流は絶えずして、しかも本の水にあらず。淀みに浮かぶ泡沫はかつ消えかつ結びて、久しく留まることなし。世の中にある人と住家とまた此の如し。玉敷の都の中に棟を並べ、甍を爭へる、尊き卑しき人の住まひは、代々を經て盡きせぬものなれど、これを眞かと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。或は去年破れて今年は造り、或は大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處も變らず、人も多かれど、古へ見し人は二三十人が中に、僅かに一人二人なり。朝に死し、夕に生るゝならひ、唯水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去る。又知らず、假の宿、誰が爲に心を惱まし、何によりてか目を悅ばしむる。この主人と住家と無常を爭ひ去るさま、いはば朝顏の露に異ならず。或は露落ちて花殘れり、殘ると雖も朝日に枯れぬ。或は花は萎みて露なほ消えず、消えずといへども、夕を待つことなし。

凡、物の心を知れりしより以來、四十餘りの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、やゝ度々になりぬ。さんぬる安元三年四月二十八日かとよ、風烈しく吹きて靜かならざりし夜、戌の時ばかり、都の辰巳より火出で來りて、戌亥に至る。はてには朱雀門・大極殿・大學寮・民部省まで移りて、一夜がほど

天和板方丈記挿繪（一）

に塵灰となりにき。火元は樋口富小路とかや。病人を宿せる假屋より出で來けりとなむ。吹き迷ふ風にとかく移り行く程に、扇を廣げたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙に咽び、近き邊はひたすら焰

を地に吹きつけたり。空には灰を吹き立てたれば、火の光に映じて、普く紅なる中に、風に堪へず吹き切られたる焰飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝ移り行く。その中の人現心ならんや。或は煙に咽びて斃れ伏し、或は焰にまぐれて忽ちに死しぬ。或は又僅かに身一つ辛くして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず、七珍萬寶さながら灰燼となりにき。その費幾何ぞ。この度公卿の家十六燒けたり。ましてその他は數を知らず。すべて都の中、三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、牛馬の類邊際を知らず。人の營み皆愚なる中に、さしも危き京中の家を造るとて、寶を費し心を惱ますことは勝れてあぢきなくぞ侍るべき。

*高倉天皇の御代

*又治承四年卯月廿九日の頃、中御門京極の邊より、大きなる旋風起りて、六條わたりまで、嚴しく吹きけること侍りき。三四町をかけて吹きまくるに、その中に籠れる家ども、大きなるも、小さきも、一として破れざるはなし。さながら平に倒れたるもあり、桁・柱ばかり殘れるもあり。又門の上を吹き放ちて、四五町が外に置き、又垣を吹き拂ひて、隣と一つになせり。況や家の內の寶數を盡くして空にあがり、檜皮葺き板の類冬の木の葉の風に亂るゝが如し。塵を煙の如く吹き立てたれば、すべて目も見えず。

天和板方丈記挿繪（二）

夥しく鳴りとよむ音に物いふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かばかりはとぞ覺ゆる。家の損亡せるのみならず、之を取り繕ふ間に、身を害ひて、片はづけるもの數を知らず、この風未申の方に移り行きて、多くの人の歎きをなせり。旋風は常に吹くものなれど、かゝる事やはある。ただ事にはあらず、さるべきもののさとしかなとぞ疑ひ侍りし。

又同年の六月の頃、俄に都遷り侍りき。いと思の外なりし事なり。大方この京の初を聞けば、嵯峨天皇の御時都と定まりにけるより後、既に數百歳を經たり。ことなる故なくて容易くあらたまるべくもあらねば、これを世の人たやすからず憂へあへるさま、理にも過ぎたり。されどとかく

言ふかひなくて、御門より始め奉りて、大臣・公卿悉く攝津國難波の京に遷り給ひぬ。世に仕ふるほどの人、誰か一人故郷に殘り居らん。官位に思をかけ、主君の蔭を賴む程の者は、一日なりとも疾く移らんと勵みあへり。時を失ひ、世にあまされて、期する所なきものは、愁へながら留まりゐたり。軒を爭ひし人の住まひ日を經つゝ荒れ行く。家は毀たれて淀川に浮かび、地は目の前に畑となる。人の心皆あらたまりて唯馬鞍をのみ重くす。牛車を用とする人なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の庄園をば好まず。

又養和*の頃かとよ、久しくなりて確にも覺えず、二年が間世の中飢餓して淺ましきこと侍りき。或は春夏日でり、或

*安德天皇の御代：

は秋冬大風・大水などよからぬ事ども打續きて、五穀悉く實らず。空しく春耕し、夏植うる營のみありて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。これによりて、國々の民或は地を捨てて堺を出で、或は家を忘れて山に住む。種々の御祈始まりて、なべてならぬ法ども行はるれども更にその効なし。京のならひ、何わざにつけても、源は田舍をこそ賴めるに、絶えて上るものなければ、さのみやは操を作りあへん。念じわびつゝさまざまの寶物かたはしより捨つるが如くすれども、更に目みたつる人もなし。偶易ふる者は金を輕くし、粟を重くす。乞食道の邊に多く、愁ひ悲しむ聲耳に充てり。さきの年此の如く辛くして暮れぬ。

明くる年は、立ち直るべきかと思ふに、剩へ疫病打ち添ひて、まさるやうに跡方なし。世の人皆飢ゑ死にけれは、日を經つゝ窮り行くさま、少水の魚の譬にかなへり。終には笠うち着、足ひきつゝみ、よろしき姿したるもの、一向家毎に乞ひありく。かくわびしれたるものども、歩くかと見れば、則ち斃れ死ぬ。築土のつら、路の頭に飢ゑ死ぬる類は數を知らず。取り捨つるわざもなければ、臭き香世界に充滿ちて、變り行く形ありさま、目もあてられぬこと多かり。況や、河原などには、馬・車の行きちがふ道だになし。

又元*暦二年の頃大地震ふること侍りき。そのさま尋常ならず。山崩れて川を埋め、海傾きて陸を浸せり。土さけて水湧きあがり、巖われて谷にまろび入り、渚漕ぐ船は浪に漂ひ、道行く駒は足の立處をまどはせり。況や、都の邊には、在々所々、堂舍塔廟、一として全からず。或は壞れ、或は倒れたる間、塵灰立ち上りて、盛んなる煙の如し。地の震ひ、家の破るゝ音雷に異ならず。家の内に居れば、忽ちにうちひしげなんとす。走り出づれば、また地われ裂く。羽なければ空へもあがるべからず。龍ならねば雲にのぼらんこと難し。恐れの中の恐るべかりけるは、唯地震なりけりとぞ覺え侍りし。その中に或武士の一人

*後鳥羽天皇の御代

天和板方丈記挿繪（三）

子の六つ七つばかりに侍りしが、築土のおほひの下に小家を作り、はかなげなる跡なし事をして遊び侍りしが、俄に崩れ埋められて、あとかたなく、平にうちひしがれて、二つの目など一寸ばかりうち出されたるを、父母かゝへて、聲も惜しまず、悲しみあひて侍りしこそ、あはれに悲しく見侍りしか子の悲しみには猛き者も恥を忘れけりと覺えて、いとほしく道理かなとぞ見侍りし。　かく夥しくふる事は暫しにて止みにしが、その餘波しば〳〵　絶えず、よの常に驚くほどの地震、二三十度ふらぬ日はなし。　十日二十日過ぎにしかば、やう〳〵　間遠になりて、或は四五度、二三度、もしは一日まぜ、二三日に一度など、大方そのなごり三月ばかりや侍りけん。

(二)　假の庵

我が身、父方の祖母の家を傳へて、久しく彼方に住む。その後緣かけ、身衰へて、*しのぶかたがた繁かりしかば、遂に跡とむることを得ずして三十餘にして、更に我が心と一つの庵を結ぶ。　これをありし住まひに准ふるに、十分が一なり。ただ居室ばかりを構へて、はかばかしくは家を作るに及ばず。　僅かに築土をつけりと雖も、門たつるにたづきなし。竹を柱として車やどりとせり。　雪降り風吹く毎に、危からずしもあらず。　處は河原近ければ水の難深く、白波の恐もさわがし。　凡てあらぬ世を念じ過ごしつゝ、心を惱ませることは三十餘年なり。　その間をり〳〵のたがひめに、おの

*住みわびて我さへ軒のしのぶ草、しのぶかたがたしげき宿かな。周防内侍（金葉集）

づから短き運を悟りぬ。すなはち五十の春を迎へて、家を出で、世をそむけり。固より妻子なければ、捨て難きよすがもなし。身に官祿あらず。何につけてか執をとどめん。空しく大原山の雲にいくそばくの春秋をかへぬる。

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉の宿りを結べることあり。いはば*旅人の一夜の宿を作り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃の住家に准ふれば、また百分が一にだにも及ばず。とかくいふほどに、齡は年々に傾き、住家は折々に狹し。その家の有樣世の常にも似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。所を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、うちおほひを葺き

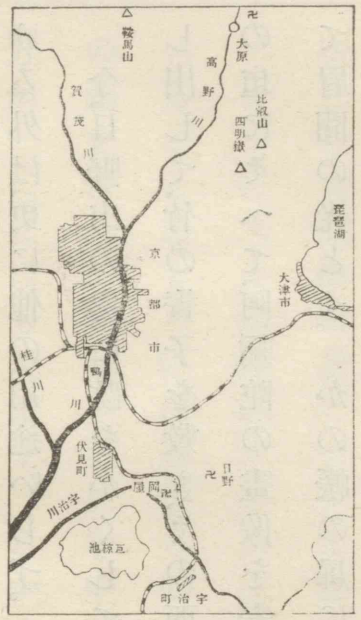
*亦猶ㇾ行人之造ニ旅宿一、老蟲之成ㇾ繭乎。其住幾時乎。（慶滋保胤が池亭記の一節）

て、つぎ目毎にかけがねをかけたり。若し心にかなはぬ事あらば、安く外に移さんが爲なり。そのあらため造る時、幾何の煩ひかある。積む所僅かに二兩なり。車の力をむくゆる外は、更に他の用途いらず。

今、日*野山の奥に跡をかくして後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、中には西の垣にそへて、阿彌陀の畫像を安置しまつりて、落日をうけて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並に不動の像をかけたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黑き皮籠三四合を置けり。すなはち、和歌・管絃・往生要集ごときの抄ものを入れたり。傍に箏・琵琶各二張を立つ。いはゆる折り箏・つ

*山城國宇治郡、木幡山の東北に當る

ぎ琵琶是なり。東にそへてわらびのほどろを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机を出せり。枕の方に爐あり。これを柴折りくぶる便りとす。庵の北に少地を占め、あばらなるひめ垣を圍ひて園とす。すなはち諸の藥草を植ゑたり。假の庵のさまかくの如し。



近附山野日

その處のさまをいはば、南に筧あり、岩を疊みて水をためたり。林軒近ければ爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木の葛跡を埋めり。谷繁けれど西は晴れたり。

觀念の便りなきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くにして西の方に匂ふ。夏は時鳥を聞く。語らふ毎に死出の山路を契る。秋はひぐらしの聲耳に充てり。うつせみの世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む。積り消ゆるさま、罪障に譬へつべし。もし念佛もの憂く、讀經まめならざる時は、自ら休み、自ら怠るに、妨ぐる人もなく、恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、獨り居れば口業ををさめつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ何につけてか破らん。もし跡*の白波に身を寄する朝には、岡の屋に行きかふ船を眺めて滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉を鳴らす夕には、潯陽の江を思ひやりて源*都督

*世の中を何にたとへむ朝びらき漕行く船の跡なき如し滿誓沙彌（萬葉集）
*世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕行く船の跡の白波。

の流をならふ。もし餘りの興あれば、屢〻松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悅ばしめんとにはあらず、ひとり調べ獨り詠じて、自ら心を養ふばかりなり。

それ三界は、ただ心一つなり。心もし安からずば、牛馬・七珍もよしなく、宮殿・樓閣も望なし。今淋しき住まひ、一間の庵自ら之を愛す。おのづから都に出でては乞食となれることを恥づと雖も、かへりてこゝに居る時は、他の俗塵に著することを憐ぶ。若し人この言へることを疑はば、魚鳥の有樣を見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざれば其の心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味もまた此の如し。住まずして誰かさとらん。

抑〻一期の月影傾きて、餘算山の端に近し。忽ちに三途の闇に向はん時、何のわざをかかこたんとする。佛の人を教へ給ふおもむきは、事に觸れて執心なかれとなり。今、草の庵を愛するも科とす。閑寂に著するも障なるべし。いかが用なき樂しみをのべて、空しくあたら時を過ごさん。

沙彌滿誓（拾遺集）

＊山城國紀伊郡、宇治川の東岸に在る

＊白樂天が琵琶行に「潯陽江頭夜送レ客、楓葉荻花秋瑟々。」の句がある。

＊權大納言源經信。

一一　石彫獅子の賦

一

番者に問へば、石工は木蔭の夢に耽りぬと。

入りて小暗き仕事場に、
刻みさしたる唐獅子の
圓き頸を手に撫でて、
誰ぞ、吟ずるは靜やかに。

朽木の棚に据ゑられて、
顏くすぼれしあら彫の
豕・狗兒・野の狐、
さては雄鹿のむらがりに、
こは秀でたる驕かな、
日浴びて立てる獅子の像。

裂けたる岩に爪かけて、
雄々し、憤るかその姿。
鬣長く背にまきて、
見れば湧き寄る春の潮。
胸は豐かに力男が
曳きしぼりたる弓の如。

忿怒現ずる明王の
廣き肩より燃上る、
焰か、長き尾は躍り、

綿毛密なる足の裏、
落ちて野薔薇の花踏むも
巣くへる鳥は目覺めんや。

（石工いみじき心得よ。）
瞳子彫られぬ唐獅子は、
光を知らぬ盲目の身、
鼻かんばしき香を嗅ぐも、
未だ前脚ふみあげて、
花園小路亂さじよ。

鑿の手またく捨てられて、
御苑の夏の曙や、
綠したゝる木の蔭に、
巨人の如く立たん時、
雄姿いかに。背に伏して
暫し想像に耽らせよ。

二

汝の王者かたどられ、
眞白き石に刻まれぬ。
野より、山より、林より
集へよ、獸、列なりて

蹄の前にひざまづき、
弱きを恥ぢて僕たれ。

偉なる靈魂くだり來て、
眞白き石に包まれぬ。
野より、山より、林より
集へよ、獸、列なりて
その輝きを身に浴びて
卑き心を拋てよ。
大なる權威顯れて、

眞白き石に具せられぬ。
野より、山より、林より
集へよ、獸、列なりて
王に捧ぐる燔祭の
聖き火盞を整へよ。

斑の牛と羚羊は
深き痛手に甘んじて、
進みて燃ゆる火に燒けよ。
誇るべきかな、犧牲の
高き譽は汝に在り。

美む群ぞ愚なる。

見よ、犧牲はそなはりぬ。

獅子は額に鬣の

長き流を顫はせて、

あら起ちあがる。「戰鬪(たゝかひ)と

勝と力の權化なり。

伏せよ。」と呼べば皆伏しぬ。

盛んなるかな、その令や。

自然は死せり永久に。

人は魔のごと强からず。

われは王者ぞ。萬有の

値の源ぞ。煩と

悶の胸の主人なり。

あゝ、運命の眩きをも

眼開いて眺め入り、

胸わなゝかぬ雄心の

若き勇氣に溢れたる、

勝利(かち)の思に漲れる

この身、この世に、何の死ぞ。

絶ゆることなき永遠よ、
われは汝の伴なりと、
聲は喇叭の音に似たり。
時に默止は破られて、
高き讃美と服從は
雷のとよみに現れぬ。

三

今想像の羽たゆむ。
見れば唐獅子日を浴びて、
豊かにも又靜かなる

姿何等の誇ぞや。
石彫永く傳はりて、
榮とならんは幾千歳。
あゝ、藝術は支配せよ、
とはの生命ぞ汝に歸する。

（薄田泣菫）*

一二　芭蕉の行脚掟の精神（一）

名は淳介*
詩人
大阪毎日新聞記者

行脚掟

一、一宿なすとも故なきに再宿すべからず。樹下石上に臥すともあたゝめたるむしろと思ふべし。

一、腰に寸鐵たりとも帶すべからず。惣べて物の命を取ることなかれ。

一、君父の讐ある處には門外にも遊ぶべからず。俱に天を戴かざる忍びざる情あればなり。

一、衣類・器財相應にすべし。過ぎたるはよからず、足らざるもしからず、程あるべし。

一、魚鳥獸の肉を好んで喰ふべからず。美衣珍食にふける人は、他事にふれ安きものなり。菜根を咬んで百事をなすべしといふ語を思ふべし。

一、人のもとめなきに己が句を出すべからず。望をそむくも然らず、問はざるに說くは說くにあらず、問ふに答へざるは宜しからず。

一、たとへ嶮岨の境たりとも所勞の念をおこすべからず、發らば中途より歸るべし。

一、馬・駕籠に乘ること勿れ、一枝の枯杖を己が瘦脚と思ふべし。

一、好んで酒を飲むべからず、饗應により固辭し難くとも微醺にして止むべし。亂に及ぼすの禁あり、祀祭の戒祭に醋を用ふるも醉をにくめばなり。酒に遠ざかるの訓あり。愼むべき事なり。

一、船錢・茶代をわするべからず。

一、他の短を擧げて己が長を顯すこと勿れ。人を誹つて

おのれに誇るは甚だいやし。

一、俳諧の外談話すべからず。雑話出づれば居眠りして勞を養ふべし。

一、女性の俳友にしたしむべからず。師にも弟子にもいらぬことなり。此の道に親炙せば、人をもて傳ふべし。惣べて男女の道は嗣を立つるのみなり。流蕩すれば心敦一ならず。此の道は主一無適にしてなす。能く己を省るべし。

一、主あるものは一枝一草たりとも取るべからず。山川江澤にも主あり。つとめよや。

一、山川舊跡したしく尋ね入るべし。新たに私の名を付くることなかれ。

一、一字の師恩たりとも忘るゝことなかれ。一句の理をだに解せず人の師となることなかれ。人に教ふるは己をなして後の事なり。

一、一宿一飯の主もおろそかに思ふべからず。さりやとて又媚諂ふことなかれ。此の如き人は世の奴なり。此の道に入るものは此の道の人に交るべし。

一、夕べを思ひ旦を思ふべし。旦暮の行脚と云ふ事は好まざる事なり。人に勞を懸くることなかれ。しばしばすれば疎んぜらるゝの意を思ふべし。はた粗食たりとも好むべからず。

右の條々、我が門の行脚は慎むべきなり。當時を見るに、此の如き掟を守つて行脚する俳客一人もなし。不相應に美を飾り、利慾のために僞を云つて世を渡る淺ましからずや。或は古人が名を賣り、自己の勝手のよきやうにいひちらすは、誠に羊頭をかけて狗肉を賣るの徒にして、切賣の功者と云ふべし。

芭蕉の刻苦の行脚は次ぎの言葉にも明瞭である。「馬・駕籠に乘ることなかれ、一枝の枯杖を己が痩脚と思ふべし。」芭蕉が馬・駕籠に乘ることを否定したのは、彼の行脚精神の趣旨が苦痛を浴び寂寞に處することを第一としたからである。苦痛を浴びるので無ければ修行にはならない。汗を搾り腸を廻らすやうな嶮しい道をただ一人歩いて行く、さういふ間に遭逢する山や川が、駕籠乘り物の上に平坐して見る山や川とその面目を異にするのは言ふまでもないことである。その山や河がかういふ苦痛の體感に依つて、靈化され、神化され、乃至悲壯化されるのは當然のことであらねばならない。これほどまでの烈しい苦痛を捧げて、その山や川に仕へることは、その山や川を、芭蕉その人の刻苦の精神によつて一つの神靈とすることである。此の場合、山や川に靈があるか否かを問ふことを要しない。芭蕉がその山や川に傾けた刻苦と忍耐とその身心の苦痛から、勢

その山や川を自身の表現と觀じ、自身の魂魄と感ずるに至つたのは當然の事であらねばならない。すなはち芭蕉は汗と涙とを償ひとして、遭逢の山河・草木を自身のものとしたのである。吾等はこの事を古への多くの開山や修驗者の事蹟の上に觀ることが出來る。修驗者が身命を賭して、或高山なり嶮峻なりを開いたと云ふことは、その山や嶮峻をその修驗者の信仰と苦痛とに依つて一個の悲壯なる神靈の地としたことである。山自身の自然の尊さは勿論であるが、吾等が羽黑や御嶽や立山などの神山に對する感應の偉大さを思ふと、ただ山自身の高大だけでは物足らない感がする。その高大に人の悲壯の力が加はつてはじめて

その山が神仙の靈地となるのであらうと思ふ。斯う云ふ意味に於て、吾等は高山や峻境が日に文明の浸蝕をうけて凡俗化してゆく現狀を痛ましく思ふものである。

一三　芭蕉の行脚掟の精神（二）

芭蕉の行脚はさう云ふ一筋の嶮しい行脚であつた。彼は一個の俳諧行者の心を以て山や野をあるいたのである。その俳諧が、尋常一樣の机上の羈旅歌の平凡に墮ちなかつたのは、もとより不思議とするに足らない。而して此の心はまた芭蕉の寂しさを求むる心とも言へる。芭蕉の旅は常に寂しかつた。強ひて寂しい人と寂しい境とを選んだ

旅である。寂しい旅であるから、自然が彼の友となつたのである。寂しいがゆゑに物の微を觀ることが出來たのである。

這ひ出でよかひ屋が下の墓の聲。

此の「這ひいでよ」といふ嘆願の叫びとも云ふべき言葉の蔭に隱されてゐる彼の寂しさを味はねばならない。それゆゑに眞に天地の微を闡かうとする詩人は、その寂しさの破られることを怖れるほどの心懸がなければならない。寂しさに處して、その寂しさの底から、まことに物の微かな生命にも親しまうとする愛惜の心が湧いて來るのである。而して此の物の微を觀ずることに就いては、芭蕉は更に次

のやうな言葉を述べてゐる。

「夕べを思ひ旦を思ふべし。旦暮の行脚と云ふことは好まざることなり……。」夕べと朝とは人の心の最も靜かなる時である。此の靜かなる時を惜しめと云ふのは、此の靜けさにゐて、靜かな物の微を觀よとの心である。物の微を觀る事は、その物の微に依つて動く自身の感を育むの謂ひである。一日の行脚に疲れた身體を置くところの宿りは、彼のためには安らかな息ひの場であつたに違ひない。此の息ひの安らかさにゐて辿る彼の幽情と微思とは、彼の行脚道中の日課として極めて重要なものの一であつたに違ひない。さう云ふ重大な意味のある朝夕を歩行の勞に費

すなと言つた芭蕉は飽くまで靜寂を愛する詩人であつたのである。

くたびれて宿かるころや藤の花。

夕べにも朝にもつかず瓜の花。

これ等の句もさう云ふ朝夕の心の吐露であつたのであらう。

以上は主として芭蕉が自然に對して持つべき行脚の心得であるが、さらに行脚道中の人と世間とに對して如何なる心掛を持つてゐたか、こゝには芭蕉の謙德と、義理堅さと、足るを知る心とを見る事が出來る。「人の求め無きに己が句を出すべからず。望をそむくもしからず、問はざるに說くは說くにあらず、問ふに答へざるはよろしからず」。これは芭蕉の謙德の表はれである。しかし謙德に似て非とせらるべきものは卑屈である。道を取つて進むものは、その道を說くべき機會が來たならば、その所信を述べることに卑屈であつてはならない。芭蕉の謙德はこの點に於て道に對する信仰の强さを忘れてはゐなかつた。

「君父の讐あるところには門外にも遊ぶべからず、俱に天を戴かざる忍びざる情あればなり」。これは芭蕉の義理堅さの心である。彼が君父の讐を忍び難しとしたのは、君父に對する義理を重んじたのである。君父の心に忍び得なかつたその讐を自身にも忍び得ないとしたのである。芭

蕉は直接にその讐を仇とするのではない、その讐を鬱憤としてゐた君父の心を自身に頒つのである。君父の負つてゐた重荷を思ひやつて、その痛ましさに自身をも與らせようとするのである。義理の最も大なるものである。吾等が芭蕉を以て空靈の虚無者流でないとするは、かういふ一面にある。斯ういふ心からは、當然

語られぬ湯殿にぬらすたもとかな。

芭蕉うゑて先づ憎む荻の二葉かな。

といふ義理の句が生れなければならない。彼が生涯故郷を忘れなかつた事、さらに彼が伊勢神宮への崇敬の篤かつたこと、また彼が伊賀の舊君を懷ふの深切であつた事、古人

と師恩とに操志の厚かつた事、これ等はみな彼が流蕩放逸の虚無詩人でなかつたことを反證するものに他ならない。而してこれ等の事は凡てことごとく芭蕉の精神を貫くところの强烈な克己主義に胚胎してゐる　己を克服して義理を立てる、己に克つて禮に復する、こゝに芭蕉に影響した支那儒流思想の一面を見るのである。芭蕉の修行の過程、その克己の全道程は、全く儒家思想の傳統その儘のやうに思へる。然るに彼は他面に於て儒家思想と全く反對の位置にある老莊の心境を覓めてゐるのである。一見して非常な矛盾であるが、芭蕉はこの兩端を殆ど天衣無縫の姿に於て内化し渾融してゐる。彼は儒家の克己道德を人とし

ての修養としてゐたのではあるが、その藝術(俳諧)に求むるところは老莊道佛の自由世界であつた。而して彼は此の過程に據つてその藝術の理想を見事に達成させてゐる。此の事はまた彼が李白と杜甫とを一身に兼有した趣のある事とも似てゐる。西行法師と源實朝とを併持した趣のある事とも似てゐる。彼はさう云ふ異なる兩端を目がけて、その兩方へ脚を跨らして、さうして異常の努力を以てその兩端を內的渾一にまで大成させたのである。斯う云ふ詩人は今の世にも珍しいが、恐らく東西古今にも稀であるとせらるゝであらう。

行脚の掟を閲して、ことに吾等の心を牽く一條は次ぎの

言葉である。「魚鳥獸の肉を好んで喰ふべからず。美衣珍食に耽る人は他事に觸れ易きものなり。菜根を咬んで百事を爲すべしといふ語を思ふべし。」この「他事に觸れ易き」と云ふ事のなかには種々の意味があらうと思ふ。殊に「菜根を咬んで百事を爲すべしといふ語を思へ」と云ふ言葉には芭蕉の刻苦の悽慘がある。是を今の世の藝術家が、酒肉に飽滿して、徒らに實感と稱し生命の躍進と唱へてゐる者に比べたならば如何であらう。芭蕉はその酒に就いては斯う言つてゐる。「好んで酒を飲むべからず、饗應により、固辭し難くとも微醺にして止むべし……。」女に就いてはまた斯う言つてゐる。「女性の俳友にしたしむべからず、師

にも弟子にも要らぬことなり。此の道に親炙せば人をも
て傳ふべし。惣べて男女の道は嗣を立つるのみなり。流
蕩すれば心敦一ならず。此の道は主一無適にして爲す。
よく己を省るべし」。併し芭蕉には女の弟子も澤山あつた
のであるから、此の言葉には猶解釋の餘地が無いではない
が、是は彼の主一無適の一向心から見た女性への警戒であ
らう。それ程の厚き敬禮を道に捧げる所がなければ、凡そ
修行といふ修行は爲し得ないと見たのが芭蕉である。

吾等は最後に、芭蕉が行住坐臥の間も如何に自分の心を
養ふことに注意してゐたかと云ふ例として、次ぎの事を擧
げなければならない。「俳諧の外談話すべからず、雜話いづ

れば居眠りして勞を養ふべし」。こゝには芭蕉の大膽不敵
がある。此の大膽不敵も究竟は道に對する修行の純一を
思ふが爲である。芭蕉は雜談や世間話の爲に身心の煩ひ
を受けるには耐へなかつたのである。もしこれを以て芭
蕉の寛大に缺くるところがあると言ふものがあるならば、
それは芭蕉の志の存する處を知らないものである。吾等
はこれと同じ心の表はれを、彼が越後の旅中に出逢つた女
との問答に見る。女も旅にある一人である。その道中の
賴りなさを詫びて芭蕉に同道を依賴するのであるが、芭蕉
はこれを素氣無く斷つてゐる。まことに冷淡である。し
かし此の冷淡は芭蕉としては當然の冷淡である。芭蕉に

はさう云ふ人情に絡まれてゐる事よりはもつと重大な仕事があるからである。

（太田水穗）

芭蕉の旅の句

野ざらしを心に風のしむ身哉。

道の邊の木槿は馬にくはれけり。

年暮れぬ笠きて草鞋はきながら。

五月雨をあつめて早し最上川。

雲の峰幾つ崩れて月の山。

荒海や佐渡に横たふ天の河。

あか〳〵と日はつれなくも秋の風。

寂しさや須磨にかちたる濱の秋。

一四　「夕暮の春」

日本畫の前途を鎖す霧は深い。闇を搜る手先に今様々な痴態が演ぜられてゐる。或者は、古い衣を近代官能の色に染めて、燦爛たる襤褸を身に纏ひ、或者は非凡の假面を被つて、奇怪な踊を踊り續けてゐる。そして現代科學の燈火を振りかざして、新しい道はこゝに在りと叫んだ者には、臭い油の香がした。吾等靜かに後陣に控へて、新藝術の擁護者たらうとする者も、遂にその狂態を見るに忍びなくなつて、「藝術は時代と共に進むものにはあらず」といふことの眞なるを認めようとするに傾いて來た。そして、悲しみの眼

を過去の藝術に振向けて、點々と書き遺された傳統の美に

瞳の曇りを拭ふことは安らかな慰めであつたとはいふも

のの、心の底にたぎる新しい生の力を感じながら、眞の美を過去にのみ見るといふことには、また堪へ難い悲しみを覺えたのである。然しながら廣島晃浦氏の「夕暮の春」を見るに及んで、吾等は再び前進への希望を恢復した。惠まれた者の道には、光が投げ與へられることを知つたからである。

空には淡く新月がかゝつて、總體の畫布は銀の朧に包まれてゐる中に、色鮮かに咲誇れるは彼岸櫻の花である。起伏する丘陵を越えて遙に僧院の屋根が見える。それを回つて建てられた家々は一段下りに漸次姿を沒して行く。斜角の向うは、恐らく果なき海の廣がりに續くのであらう。前景には可憐な春の草、薊・車前草・唐人草或は名もなき雜草

のやうなものが、黄色い花をつけて夕暮の色に滲んでゐる。そして、跪いて張り切つた乳房を搾る女の姿が、稍くつきりと強い線で簡素な輪廓にくゝられてゐる。それが唆る夕暮の春の情調は、用捨なく吾等の美感に融け込む。第一印象である。

一歩を進めて仔細に畫面を檢べて見ると、構圖は有の儘なる自然の一角の切り取りである。色彩と調和とは、快感に化せらるべき美そのものである。特にその調子は、神祕の力を率ゐて恍惚の境に吾等を魅する。描寫の上に些かの誇張もなく、技巧に於て何等の詭計を見出されない。これを物の外貌を再現する企畫としても、極めて自然的ではあるが、その修練を經た寫實の筆は、更に深く現實の殼を剔つて、象徴的なる第二の意義を色づけた。卽ち淡く悲しい色調は、永遠に憧れる春の夕暮の心もち、魂の鄕愁を象徴する。そして、女の溫和なる表情と豐滿なる肉體とは、甘い親しみに獻欷くやうな溫覺を刺激して、象徴的なる意義に芳烈な香を滴らす。

凡そ近代藝術の傾向として、その惡しきものは傳統の束縛から脫れようとする焦燥の爲に、自ら異常なるものの愛好者となり、或は未完成の讃美者となつて、奇怪の邪路に墜つる。その佳きものは自然の忠實なる再現を貫いて、内に潛む靈性を暗示しようとする。今晃浦氏の描く所は、誠實

な寫實主義の修練を經て、その當然なる歸結として意味深い新象徴主義に導くのである。吾等は迷へる儕輩を遠く駈け拔けて、新しい道を開拓し、且前途への樂觀に引戻した氏の爲に、一盞を擧げて讃嘆の辭を捧げなくてはらぬ。

（春山武松）*

*美術批評家

一五　櫻川

シテ　狂女　子方　櫻子
ワキ　僧　ワキヅレ男　人商人
ワキヅレ　里人

男「かやうに候者は、東國方の人商人にて候。われ久しく都に候ひしが此の度は筑紫日向に罷下りて候。又きのふの暮程に、幼き人を買取りて候。彼の人申され候は、此の文と身の代とを、櫻の馬場の西にて、櫻子の母と尋ねて、確に屆けよと仰せ候程に、唯今櫻子の母の方へと急ぎ候。此のあたりにてありげに候。先づ〳〵案内を申さばやと存じ候。いかに案内申し候。櫻子の母の渡り候か。シテ「誰にて渡り候ぞ。男「さん候、櫻子の御方より御文の候。又此の代物を確に屆け申せと仰せ候程に、これまで持ちて參りて候。構へて確に屆け申すにて候。シテ「あら、思ひ寄らずや、先づ〳〵文を見うずるにて候。さてもさても、此の年月の御有樣、見るも餘りの悲しさに、人商人に身を賣りて、あづまの方へ下

り候。なう、其の子は賣るまじき子にて候ものを、や、あら悲しや、早今の人も行き方知らずなりて候はいかに。これを出離の緣として、御樣をも變へ給ふべし。唯返す〳〵も名殘こそ惜しう候へ。（地歌「名殘惜しくは何しにか、添はで母には別るらん。獨り伏屋の草の戸の、獨り伏屋の草の戸の、明し暮らして憂き時も、子を見ればこそ慰むに、さりとては我が賴む、神も木華開耶姫の、御氏子なるものを、櫻子とめでたび給へ。さなきだに住みうかれたる古里の、今は何にか明暮を堪へて住むべき身ならねば、我が子の行方尋ねんと、泣く泣く迷出でて行く、泣く〳〵迷出でて行く。（中入）

ワキ（三人）次第「頃待ち得たる櫻狩、頃待ち得たる櫻狩、山路の

*筑波嶺のこのもかのもにかげはあれど君がみかげに勝すかげはなし（古今集東歌）

櫻川の舞臺面

春に急がん。ワキ「これは常陸の國磯邊寺の住僧にて候。又これに渡り候幼き人は、いづくとも知らず、愚僧を賴む由仰せ候程に、師弟の契約をなし申して候。又此のあたりに櫻川とて花の名所の候。今をさかりの由申し候程に、幼き人を伴なひ、唯今櫻川へと急ぎ候。（三人）歌「*筑波山このの

もかのもの花盛り、雲の林のかげ繁き緑の空もうつろふや、松の葉色も春めきて、嵐も浮かむ花の波、櫻川にも著きにけり。　ワキヅレ「いかに申し候。何とて遲く御いで候ぞ。待ち申して候。ワキ「さん候。皆々御供申し候程に、さて遲なはりて候。あら、見事や候。花は今を盛りと見えて候。ワキヅレ「なかなかの事、花は今が盛りにて候。又こゝに面白き事の候。女物狂の候が、美しき抄網（すくひあみ）を持ちて櫻川に流るゝ花を抄ひ候が、けしからず面白う狂ひ候。これに暫く御座候ひて、此の物狂を幼き人にも見せ參らせられ候へ。ワキ「さらば其の物狂を此方へ召され候へ。ワキヅレ「心得申し候。やあ〳〵、彼の物狂にいつもの如く、抄網を持ちて此方へ來れと申し候へ。

後シテ一聲「いかにあれなる道行人、櫻川には花の散り候か。何、散り方になりたるとや。悲しやな、さなきだに、逝く事易き春の水の、流るゝ花をや誘ふらん。花*散れる水のまにまにとめ來れば、山にも春はなくなりにけりと聞く時は、少しなりとも休らはば、花にや疎く雪の色、櫻*花散りにし風の名殘には、地「水なき空に波ぞ立つ。シテ「おもひも深き花の雪、地「散るは涙の川やらん。シテサシ「これに出でたる物狂の故郷は筑紫日向のもの、さも思ひ子を失ひて、思ひ亂るゝ心づくしの、海山越えて箱崎の、浪立ち出でて須磨の浦、又は駿河の海過ぎて、常陸とかやまで下り來ぬ。げにや、親子の道な

*古今集清原深養父の歌

*櫻花散りぬる風の名殘には水無き空に波ぞ立ちける

らずば遙けき旅をいかにせん。こゝに又名に流れたる櫻川とて、さも面白き名所あり。別れし子の名も櫻子なれば、かたみといひ折といひ、名も懷かしき櫻川に、地歌「散り浮く花の雪を汲みて、自ら花衣の春のかたみ殘さん。花鳥の立別れつゝ親と子の、立別れつゝ親と子の、行方も知らで天さかる鄙の長路に衰へば、たとひ逢ふとも親と子の、面忘れせばいかならん。うたてや、しばしこそ冬籠りして見えずとも、今は春べなるものを、我が子の花はなど咲かぬ。我が子の花はなど咲かぬ。

ワキ「此の物狂の事にてありげに候。立寄りて尋ねばやと思ひ候。いかに、これなる狂女、おことの國里はいづくの人

ぞ。シテ「これは遙の筑紫の者にて候。ワキ「それは何とてかやうに狂亂とはなりたるぞ。シテ「さん候。唯一人ある忘形見の嬰兒に生きて離れて候程に、思が亂れて候。ワキ「あら痛はしや候。又見申せば、美しき抄網を持ち、流るゝ花を抄ひ、剩へ渴仰の氣色見え給ひて候は、何と申したる事にて候ぞ。シテ「さん候。我が故郷の御神をば、木華開耶姫と申して、御神體は櫻木にて御入り候。されば、別れし我が子も其の御氏子なれば櫻子と名づけ育てしかば、神の御名も開耶姫、尋ぬる子の名も櫻子にて、又此の川も櫻川の名も懷かしき花の散りをあだにもせじと思ふなり。ワキ「謂はれを聞けば面白や、げに何事も緣はありけり。さばかり遠き筑紫より、此の

東路の櫻川まで下り給ふも緣よなう。シテ「先づ此の川の名に負ふこと、遠きにつきての名譽あり。かの貫之が歌はいかに。ワキ「げに〳〵昔の貫之も、遙けき花の都より、シテ「未だ見もせぬ常陸の國に、ワキ「名も櫻川、シテ「ありと聞きて、地歌「常*よりも春べになれば櫻川、春べになれば櫻川、波の花こそ間なく寄すらめと詠みたれば、花の雪も貫之も古き名のみ、殘る世の櫻川瀨々の白波繁ければ、霞うながす信太の浮島の、浮かめ浮かめ水の花、げに面白き河瀨かな。げに面白き河瀨かな。

*後撰集に出づ

ワキ「いかに申し候。此の物狂は面白う狂ふと仰せ候が、けふは何とて狂ひ候はぬぞ。ワキツレ「さん候。狂はするやうが候。櫻川に花の散ると申し候へば、狂ひ候程に狂はせて御目にかけうずるにて候。ワキ「急いで御狂はせ候へ。ワキツレ「心得申し候。あら笑止や、俄に山颪のして、櫻川に花の散り候よ。シテ「由なき事を夕山風の奥なる花を誘ふござめれ。流れぬさきに花すくはん。ワキ「げに〳〵見れば山颪の木々の梢に吹き落ちて、シテ「花の水嵩は白妙の、ワキ「波かと見れば上より散る、シテ「櫻か、ワキ「雪か、シテ「波か、ワキ「花かと、シテ「浮立つ雲の　ワキ「河風に　地次第「散ればぞ波も櫻川、散ればぞ波も櫻川、流るゝ花をすくはん。シテ「花の下に歸らん事を忘れ水の、地「雪を受けたる花の袖。シテ「それ水流落ちて春とこしなへにあり。地「月凄じく風高うして鶴かへらず。

*岸花紅照レ水　洞樹綠含レ風（杜甫）
*山花開似レ錦　澗水湛如レ藍（碧巖錄）

*古今集伊勢の歌
*ちりぬればのちは芥になる花を思ひ知らずもまどふ蝶かな（古今集僧正遍照の歌）
*枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水の泡とこそなれ（古今集菅野高世の歌）
*百千鳥花になれゆくあだし身ははかなきほどに羨まれぬる（古今六帖）

シテサシ「岸花紅に水を照らし、洞樹翠に風を含む。「山花開けて錦に似たり。　澗水湛へて藍の如し。シテ「面白や、思はずこゝに浮かれ來て、　地「名も懷かしみ櫻川の一樹の蔭、一河の流、汲みて知る名も所から、あひにあひなば櫻子の、是又他生の緣なるべし。クセ「げにや年を經て花の鏡となる水は、散りかゝるをや曇るといふらん。　まこと散りぬれば、後は芥になる花と、思ひ知る身もさていかに。　我も夢なるを、花のみと見るぞはかなき。　されば、梢よりあだに散りぬる花なれば、落ちても水のあはれとは、いさ白波の花にのみ、馴れしも今は先立たぬ、悔の八千度百千鳥、花に馴れゆくあだし身ははかなき程に羨まれて、霞をあはれみ、露を悲しめる心なり。

*東路の道のはてなる常陸帶のかごとばかりもあはんとぞ思ふ（新古今集讀人不知）

*花見むと群れつゝ人の來るのみぞあたら櫻のとがにはありける（西行）

シテ「さるにても名にのみ聞きてはるばると、　地「思ひわたりし櫻川の、浪かけて常陸帶のかごとばかりに散る花を、あだになさじと水をせき、雪を湛へて浮波の、花の柵かけまくも忝しやこれとても、木華開耶姫の御神木の花なれば、風もよきて吹き、水も影を濁すなと、袂をひたし、裳裾をしをらかして、花によるべの水せきとめて、櫻川になさうよ。シテ「あたら櫻の　地「あたら櫻のとがは散るぞ怨なる。　花もうし、風もつらし。散ればぞ誘ふ、シテ「誘へばぞ散る花葛。　地「かけてのみ眺めしは、シテ「なほ青柳の絲櫻、　地「霞の間には、シテ「樺櫻、地「雲と見しに　シテ「三吉野の　地「三吉野の、三吉野の川淀たきつ波の花をすくはば、若し國栖魚やかゝらまし。　又は櫻

魚と聞くもなつかしや。いづれも白妙の花も、櫻も、雪も、波も皆がらに、すくひ集め持ちたれども、これは木々の花、まことは我が尋ぬる櫻子ぞ戀ひしき。我が櫻子ぞ戀ひしき。

ロンギ「いかにやいかに、狂人の、言の葉聞けば不思議やな。若しも筑紫の人やらん。シテ「今までは誰ともいさや知らぬ火の、筑紫人かとのたまふは、何のお爲に問ひ給ふ。地「何をか今は包むべき。親子の契朽ちもせぬ花櫻子ぞ御覽ぜよ。

シテ「櫻子と櫻子と聞けば夢かと見も分かず、いづれ我が子なるらん。地「三年の日數程ふりて、別も遠き親と子の シテ「もとの姿は變れども、地「さすが見なれし面だてを、シテ「よくよく見れば、地「櫻子の花のかほばせの、*こは子なりけり、

*親の親ぞ今はゆかしきほととぎすはや鶯の子は子なりけり（今鏡）

鶯の、あふ時も鳴く音こそ嬉しき涙なりけれ。*リ「かくて伴なひ立歸り、かくて伴なひ立歸り、母をも助け、樣變へて、佛果の緣となりにけり。二世安樂の緣深き、親子の道ぞ有り難き。親子の道ぞ、有り難き。

一六　創作論

生は戰である。地上に生を享けたその第一日――否その第一瞬からして、既に我々は戰の苦惱を經驗してゐる。嬰兒の肉體生活そのものが、明らかに飢餓や黴菌や冷熱との不斷の戰ではないか。安らかに平和に母の胎内に眠る十個月はしばらく問はず、一たび母胎を離れて、一つの個的

存在物としての生を始むるや否や、この戰の苦痛は避け難きものとなる。母胎を出でると共に、おぎやあと叫ぶあの聲こそは、人間苦の叫びの第一聲ではないか。安らかな母胎の床を出て、はじめて外界の刺激に觸れた、その瞬時に放つ產聲が、始めて馬を「生」の陣頭に立てたものの雄たけびの聲であるか、はた苦悶の第一聲であるか、或はまためでたく生を地上に享けたるものの歡呼の聲であるか、そはともかくも、かの呱々の聲は、かかる意味に於て文藝と全く本質を同じくしたものだと見ることが出來る。やがて飢餓を免れんがために、嬰兒は更に母の乳房を求めて藻搔き、乳を與へられて後は、天使の如く眠るその顏に、美しい微笑さへも

見られるのである。この藻搔きと、この微笑と、これは卽ち人間の詩歌であり藝術である。生の力に溢れた强い子供ほど、呱々の聲も亦大きい。その聲、その藝術の無いものには、唯「死」があるばかりだ。

美の快感だの、趣味だのと云ふ、極めて消極的な暢氣な考で文藝を解釋し得たのは、過去のことであつた。文藝が若し俳・茶の筵に過ぎないか、花鳥風月の樂しみであるか、或はお姫樣の慰みにする綺麗ごとであるならばいさ知らず、苟くも文化生活の最高位に立てる人間活動であるならば、やはりその根柢を生命力の躍進と云ふところに置いて解釋するよりほか、道は無いと思ふ。ダンテやミルトンやバイ

ダンテ　伊太利の文豪
ミルトン　英國の詩聖
バイロン　英國の評論家
ブラウニング　英國の詩人
トルストイ　露國の文豪
イブセン　スカンヂナビアの文豪
ゾラ　佛國の小說家
ボドレエル　佛國の詩人
ドストイエフスキー　露國の小說家

*名は辰夫　英文學者　文學博士　京都帝國大學教授　大正十二年歿

ロンを讀み、或はブラウニング・トルストイ・イブセン・ゾラ・ボドレエル・ドストイエフスキイ等の作品に接するとき、誰かまた、さう言ふ駄洒落的の、暢氣千萬な、遊戲氣分を容れる餘地があらうぞ。わたくしは文藝上に、唯美しいだの、面白いだのと言ふ快樂主義的藝術觀を飽くまでも排斥したい。殊に生の苦惱の劇しい近代に現れた文學に就いて、痛切にこのことを感ずる。情話式の遊蕩記錄、不良少年のいたづら日記、文士生活の樂屋落、若しそんなもののみが我が文壇を横行するならば、それは疑もなくわれらの文化生活の禍である。文藝は斷じて俗衆の玩弄物ではなく、嚴肅にしてまた沈痛なるべき人間苦の象徵であるからだ。（*厨川白村）

一七　白村を憶ふ

亡友文學博士厨川白村不幸震災に遭ひ、可惜英才を抱いて世を辭してから、烏兎匆々、早一年餘の光陰を過した。而して今茲に厨川白村集の出版を見るのは、實に好記念として、非常に有難く感ずるところである。それは眞に故人の偉大なる魂の成長の詳細なる記錄とも看られよう。蓋し故人は素より只一個の才人・文士ではない。その資質の上より論じたならば、或は君は日本國の產んだ最第一の文學者とも謂へるだらう。文學者は固より文士とは自から別である。個人に、社會に、深く人間そのものの眞味を掬して、

これを愛翫しつゝ、徐ろにその歸趣を尋究して、遂に克く一大人生觀を創造する樣に成るところは、寧ろ大哲學者と相對較すべきものがある。彼は智慧に於てし、此は情意に於てするだけの相違だと見たい。

△

廚川白村

想ふに、明治維新以來、所謂西洋文學の大家としては、誰しも鷗外・漱石・柳村の三氏を擧げるだらう。否、尙別に逍遙博士もありはするが、それは今暫く措いて言はない。然り而して、吾が白村博士は是等諸先輩の後を承けて、更に一頭地を拔いたものだと言つても咎はあるまい。勿論人には各長短があるから、輕々しく月旦は出來ないが、併しどちらかといふと、鷗外は飜譯家である。漱石は創作家である。將又、柳村は美文家であると同時に、觀賞家であつたと謂へる。從つて前述の意味に於ける文學者としては、三者未だしと言つても妨なく、只獨り吾が白村に於てのみ、これを求めることが出來ると言つても、必ずしも過褒ではあるまい。

△

否、更に一歩進めて、仔細に考察して見ると、吾が白村と他の三氏とは、その自ら任じてゐたところに於ても、早く一大

相違がある樣に思はれる。それは他でもなく、白村は只單に文筆を弄し、所謂藝に遊ぶものとは、自らその撰を異にしてゐたからである。白村は先に『象牙の塔を出て』と題し、その近什を集めて一冊子として出版したことがある。當時この書名は、實に江湖一般讀書子の耳目を聳峙せしめたものである。といふのは、白村自身も亦是一個の文學者であるとはいへ、夫のテニスンやヴィニイの樣に、徒に藝術の爲の藝術を旨として、創作や鑑賞に沒頭することを敢へてせず、寧ろラスキンやモーリスの轍を履んで、活世界に打つて出で、廣く民衆・世俗と相伍し、其處に人生當面の問題に觸接して、これを批判し、これを指導せんと志してゐたからで、そ

の竊に期待してゐたところは一種の社會改造であつたことは明瞭である。彼は畢竟現代社會に於ける、各方面よりの壓迫の苦惱を最も痛切に感受して、人間に同情し、人間の眞味を深く掬愛した人であつたのである。

△

從つて、又白村の死後未だ幾ばくならず、その遺稿の第一として出版されたものにも、特に『十字街頭を往く』といふ書名が著者自身に依つて豫て附けられてゐたのは至極面白い樣に見受ける。實に、故人は生前官立の高等學校や大學に教授として勤務はしてゐたけれども、世の蕩々たる學究先生や道學者流とは、全然その行き方を異にした人で、常に

一切の舊物を破壞し、其處に新天地を創造しようとした熱心振りは、その未定稿たる『人間讃美』のうちに於て、讀者の肺腑を刳らんばかりに、鋭く描き出されて居るのを觀る。

將又、それにつづいて『苦悶の象徴』といふ遺稿も出たが、この書名も亦固より輕々看過することを許されざるもので、それは元來文學なるものは、自ら深く人生のあらゆる辛酸・艱苦・煩悶・憂慮を味はひ體驗した人にして、始めて眞にこれを能くするものだとは、故人平素の持論であつたからである。これも亦、彼の文學を以て動もすれば徒なる遊戯三昧視する者の、容易に喝破し能はざるところであらう。

斯樣に觀て行くと、自分が劈頭第一に、吾が白村は一大文學者として、他の尋常文士とは全然その資質を別にしてゐると言つた譯も、よく分つたらう。而してそれは固より故人自身の稟賦に由り、境遇に由つて、半生の間に漸く作り上げられたものには相違なからうと考へるが、それと共にその學窓に於ける多年勉强の効も、亦甚大なものがあることを知らなければならぬだらう。然り、故人の出世作は申す迄もなく『近代文學十講』である。而して、それは寧ろ一種の紹介で、敎壇白墨のにほひの失せないものであると、著者自ら卑謙して斷つてゐる樣だが、併し自分は今度再びそれを通讀して、實に前世紀の後半期より、所謂世紀末を經過して、新世紀の今日迄に渉り、一切思潮の本流・支流を辿つて、丁寧・

親切に案内し説明してくれたものだとし、吾が國は勿論、遠く他の國に求めても、一寸これと匹敵するものはなからうと、深く感服したのである。特にそれは科學萬能、自然主義横行の時代より始めて、一々その餘弊の及ぶところを指摘しつゝ、終に最近の新理想主義に立ち入つたところは、誠にその書名を改めて、『最近思潮史十講』としても、毫も差支はあるまいと看た。蓋し此の如きは、博識綜覽、而も專心致思、克く百般の人事に對し、複雜の世相に向つて、燃犀の明を以て批判するものでなくては出來ない。それは憚りながら、他の諸博士の全集を渉獵して見ても、恐らく看出し難からう。

△

文學博士
教育學者
元京都帝國大學教授

何はともあれ、自分は今茲にこの一部六卷の全集は亡友厨川白村がやがて一大文學者たるべき魂の成長の跡を、一目瞭然たらしめるもので、兼ねて明治より大正に亙つて、眞實人間味掬愛者の遺した最もよい禮讃文だと評するには、毫も躊躇しない。嗚呼、彼の生涯は不幸にして短かつたが、彼の藝術は比較的に甚だ豐富である。自分は這の全集を暫く號して、深遠博大なるアンスロポソフヒーの一大結晶だと言はうと思ふ。

（谷本富）

一八　忙中の閑

昨夜のはげしかつた颱風が全く過去つて、すつきりと晴

れた爽かな朝になり、私の階上の部屋の東向の障子一ぱいに、黄ばんだ初秋の日光が當つてゐる。南の窓硝子を透して眺める空の色のみづみづしさ。颱風の陣の後詰から落伍した一筋二筋の雲が、銀白色をして悠々と通つて行く。淺葱色に濡れた木々の近い梢は、何れも洗はれた空の大氣の中に顔を上げて笑つてゐるが、無風の靜けさの中に一葉の戰ぎをも見せない。

今朝の自然は東京の中と思はれない位に、ゆるやかな速度を持つてゐるが、人間の動きはこの山の手にも、やはり平日のやうに忙しい事が感ぜられる。折々濠を越して北の窓硝子をゆする電車の遠鳴り、また折々横町を通る自動車

の號笛が聞えて來る。それに向ひの岸上の金春の家元にもう稽古が始まつて、鼓の音が私の家の塀の中へ打ちおろされる。私もまた今日の筆を執らねばならぬ。

私は机に向つて坐つてゐる。さうして原稿紙を展げる前に、ぢつと私の周圍を見廻して見る。今朝は此の部屋にいろいろの花が生けられてゐる。すべて此の一兩日の間に人から贈られた花である。花は一一の花に、異なる風情が備はつてゐる。それに今見るのは、一人一人の異なる友情の溫かさが添うてゐる。のみならず、私は其の生けられた一一の瓶や壺の趣をも、花と一緒に融け合はせて眺める事が好きである。

私達夫婦には、骨董趣味が殆ど缺けてゐるので、花を生けるにも高價な瓶の類を一つも持つて居ない。　河合寛二郎・富本憲吉・西村伊作三氏の作られた壺を、三氏から貰つたものの外には、夜店で買つたものや、人から貰つた外國酒類の空瓶で濟ませてゐる。　其等の物は唯瓶として眺めても、それぞれの美しさを持つてゐるが、花を生けて見ると、その生けた花に依つて新しい諧調の美が創造され、花の新しいことは言ふまでもないが、瓶も亦その花と共に新しくなるのを感じる。

私達の書齋である此の部屋は、書册と雜多な書き物とで常に混亂してゐる。　年に五六度根本的に整理はしても、直に錯落たる體裁になつてしまひ、必要な物が紛れ込んで、急な場合に困る事が尠くない。　整然と配置の出來る書齋を欲しいと思はぬでもないが、借家ずまひでは不可能な事と斷念してゐる。　この雜然たる書齋の中に花の無い日は、煤色をした寂しさを覺えるが、かうして今朝のやうに七種の瓶や壺に花が生けられ、その花と瓶とが取亂した書册の中の彼方此方から、盛裝した子達のやうに挨拶の微笑を投げて、いろいろのなさけある言葉を掛けてくれる日は、私達の書齋も華やかになり、私の氣分も浮き立つ。　ああ、何と言ふ幸な今朝の一時であらう。

人生の問題は紛糾して、考へれば考へるほど解決が困難

であり、其の日主義の頽廢した心狀に墮落しない限りは、誰の心にも未來の暗く塞がるのを感ぜずにはゐられない。併し、かういふ平和な幸な瞬間が折折あるので、誰もほつと息をつくのではなからうか。

見やうに由つては、今の時代にかういふ瞬間を偶持つことも、過分な贅澤であるかも知れない。「命の洗濯」と言ふ諺があるやうに、實際かういふ瞬間があるので、言ひ換へれば、私達無產・過勞の大多數の人間にもかういふ贅澤な主觀的瞬間があるので、疲れと汚れとに滿ちた命が、暫くながら洗ひ清め去られるのである。

私達はこの贅澤を保有したい。これをさへ奪はれたら、

人生は牢獄である、苦役場である。私は孔子が偶小閑を得て二三子と沂の溫泉に浴し、詩を微吟しながら歸つて來るのを、人生最上の樂しみであると言つた心持が、かういふ瞬間にだけ同感される。

愛・自由・平等・正義・創作・健康、其等のものが最大の樂しみである事は言ふまでもなく、また其等の樂しみを實現するために苦鬪する生活の嚴肅なことも亦勿論であるが、そのために緊張した生活から、一寸の間解放されて、超越的な、無關心的な、碎けて言へばぼんやりとした心持で、今朝のやうな自然の平和の中に浸つてゐる事の樂しみは、絕對の價を持つてゐる。此の樂しみがあるので、人は次の瞬間から心の

健かさを回復し、人間共存の相對的生活に更に奮鬪する勇氣が生じる。睡眠が、肉體の健康に必要であるやうに、功利を超越した、言はば草木と同じやうに日光に觸れ風に吹かれて、自然と一體になつた瞬間が、心の健康に必要である。能率・能率と言つて「忙」の生活ばかりが強調されて居たら、人は頽廢・衰弱して、結局その能力を失ふであらう。是非も功過も忘れた「閑」の生活の瞬間があるので、私達は救はれるのであるが、現代多數人には、この瞬間の惠まれる度數が餘りに乏し過ぎる。

（與謝野晶子）

*歌人評論家

一九　對話

病牀の人「八疊の一室を天地として、單調な一日々々を送るのも是で半年だ。思へば此の半年といふもの、全く醫者の言葉に釣られてゐたのだ。此の頃神經衰弱の高じるにつけて、その欺かれてゐたのが甚だ腹立たしく感ぜられて來た。半年なら半年、一年なら一年と、初から豫告して置いてくれゝば、僕もその覺悟で、心安く病牀にゐることが出來たであらうと思ふ。八月一杯には癒るだらうといふから、休暇中の辛抱だと思つて、指圖通りに大人しく養生してゐる中に、八月も何時しか暮れてしまつた。九月一杯も牀にゐたら、湯にも入れるやうにならう、散歩も出來るやうにならう、さうなると、ずん〳〵回復するとい

ふから、さうかと滿腔の希望を十月といふ名にかけて待つてゐると、それも空しい望と消えてしまつた。更に十一月・十二月と、空望は幾度か繰返されて、その度毎に空虛な言譯の言葉と、與へられる微かな希望の光に慰められて、こゝまで來たのだ。この頃になつて、そろ〳〵神經が高ぶつて、我慢にももうさういふ言葉が聞いてをられなくなつたから、一體何時になつたら回復するだらうと聞くと、醫者はこの病氣は早くて一年、長ければ二年半もかかるのであるが、貴方は半年でこれまでになつたのだから、大變成績の好い方だといふ。癪だからね、それならば、これまで貴方の仰しやつたことは皆私を欺してゐたの

かと詰問すると、醫者は唯妙に笑つてゐた。半年の長い間醫者輩の甘言に釣られてゐたかと思ふと、腹が立つて腹が立つてしかたがなかつたから、馬鹿野郎とでも罵つてやりたかつたけれど、どうせ低級な人間だと思つて我慢してゐた。一體、醫者が何の權能で、人を釣り人を欺いて、平氣でゐるだらう。馬鹿々々しいに程がある。」

見舞の人「君まあさう言ふものでもないさ。何も惡い動機で欺くのではないよ。病人は醫者の言を守るのが義務だよ。君のやうに醫者に釣られたと思へば腹も立たう、癪にも障らうが、よく考へて見給へ、今の學問で、君が期待するやうに的確に將來を豫言し得るものが何一つでもあ

るか。天氣豫報の一日先きの豫言すら、當らぬ勝ぢやないか。一週間後の世界の變動が豫言し得られたら、カイザーも今の慘めな樣にはならなかつただらう。ロイドジョージやクレマンソーも拜跪してその人の教を請ふを辭しなかつただらう。世界のあらゆる富を、掌中に集めることすら不可能ではないだらう。豫言の出來ない人間の智慧を信じ過ぎると腹も立つが、人間の智慧の哀れさを思へば、何事もまあ運に任せ、自然に任せるに限る。心を焦燥たせるだけが損だね。」

病牀の人「それは君の言ふ通りだ。併し人を欺き、人を釣るのは惡い事だ、惡だ。」

獨逸前皇帝

大戰當時の英首相

大戰當時の佛首相

見舞の人「成るほど、釣るといへば惡い。けれども、釣ると見なくても、君に希望を與へてくれたと見れば、それでよいではないか。一體、僕に言はせると、人生といふものが釣られてゐるものではあるまいか。理想といひ、希望といふと立派だが、君にいはせると、それが欺くのだね、釣るのだね。希望や理想が、希望通り、理想通りに實現された例があるか。成し遂げられるものは、何時もその內の幾分だ。併し、今日は今日で、明日の希望を持ち、明日は明日で、明後日の希望を持つて、それが重なつて一月となり、一年となり、十年となり、一生となつて行く。鼻の先きにぶら下げられた大根の欲しさに、一里・二里の道を歩み續ける馬の

やうなものだ。何年經つても充たしきれない希望に釣られ、理想に欺かれて、七十年・八十年の長い生涯を、最後まで光明を見失はないで辿る所に、人生の面白みがあるのではあるまいか。病人だつて此の希望を失はないことが、回復に必要な條件ぢやあるまいか。」

病牀の人「僕だつて、まだ希望の光明は失はないさ。だから、斯うして落ちついて養生してゐられるぢやないか。」

見舞の人「現に目前に迫つてゐる新年にしても、よく考へて見れば、門松は冥土の旅の一里塚に相違ない。それだのに、人は儀式を設けて祝ふのである。めでたいと祝ふ心は、單に形式・因襲に囚はれた空虛なものだらうか。僕にはさうは思へぬ。心に問うて見ても、決して澁面作つたり、べそをかいたりして新年を迎へようとはしてをらぬ、改まつた嬉しい心で迎へようとしてゐる。冥土の旅の一里塚と思へば悲しくもあるが、喜んで迎へるといふことも事實だ。一體、歳晩から年頭にかけて、我々の心は二つの方面に向つて動く。一つの方向は後である。これが過ぎ去る年の回顧であり、經驗して來た長い過去の追想である。そこには憂鬱がある、悔恨がある、懺悔がある、悲哀がある、暗黑がある。併しまた懷かしさもある、喜びもある、詩もある。この回顧の眼と共に、前を望む瞳には將來が映る。そこには勇躍がある、憧憬がある、希望がある、

光明がある、理想がある。併しまた浮かれがあり、冒險があり、野心もあり、詩もまたある。斯うして、回顧の左の眼を以て舊年を送り、希望の右の眼を以て新年を迎へる。此の右の眼の働く限り、我々は希望・理想の光を見失はない。そして此の光に釣られて、何時まで行つても盡きない眼界の末を望みつゝ、崢嶸の山を越え、淼漫の海を渡り、廣漠の野を過ぎて進み進みて行く。喘ぎつゝ、歎ちつゝ、泣きつゝも辿り行く。君これが我々の生活だ、現實だ、人生だ。醫者の言葉の如きは、君何でもないではないか。醫者の言葉が怒るべきものであるならば、君希望は怒るべきものだ。醫者の言葉が呪ふべきものであるならば、

理想は呪ふべきものだ。」

病牀の人「さうだ、實にさうだ。希望や理想は怒るべき、呪ふべきものだ。少くとも今の僕に取つてはさういへる。僕には過去が馬鹿らしい。そして現在が唯苦しいのだ。かうして病床に生きてゐるのが苦痛なのだ。此の現在の苦痛を引延ばし引延ばし行く將來が、何で嬉しからう。」

見舞の人「君、君は現在の苦を現在の苦として受取るからいけないのだ。現在の苦をなぜ未來に在る理想・希望の一部として歡迎しようとしないのだ。理想と現實とを劃然分けて考へるのは學者の勝手だが、我々の實際生活では、これを別物として考へるのは間違だ。よく人が理想は

成るべく高遠に持て、實行は成るべく着實であれと訓へるが、それは實際の教訓としては半文の價値もないものだ。君實行を着實に着實にと心懸けて行く今の政治家・實業家の事業なるものが、何處に人生をより高くより清く導いて行くか。學者・思想家の言ふ所、說く所を、それは理想としては立派だがと實行の世界から遠ざけて行く彼等は、何時までも何時までも汚らはしい豚小屋に蠢動して身の臭いことを知らないもののやうだ。低級な現實を何時までも住むべき人生だと心得てゐるものだ。彼等の世界には進歩もない、向上もない、飛躍は固よりない。僕は現實を理想の一部として生きよといふ、卑近な

譬喩でいふならば、富士登山者に就いて考へて見給へ。その人は富士山頂の人となることを目あてに、自分の家から出かける。そこで、富士山頂に達するといふことを理想として置かう。そして、閾を跨ぐからの一歩々々を現實として置かう。富士山頂に達するといふことは、此の一歩々々の累積に他ならぬ。卽ち現實の一部として、ちやんとその中に含まれてゐる。かう考へると、現實の一歩々々は確實に理想に向つて運ばれねばならぬ筈だ。富士山に登らうとしてゐながら、北に行き、西に行き、南に行きしてゐては、何時まで經つても山頂には達せられない。理想は棚に祀つて置いて、唯實行を着實にしようと

する人の行き方がそれだ。だから、君にしても、牀上の退屈な、苦痛な一日をば、回復の一階級と考へることが必要だ。その上は自然に任せるだね。」

病牀の人「僕もさう焦燥つてばかりはゐないから、安心してくれたまへ。なに、癇癪の起らぬ時は、これでも自然に任せて平靜なものだよ。」

見舞の人「それに限る、それに限る。芭蕉の「もろ〳〵の心柳に任すべし。」といふ句は、今の智慧に囚はれる人、學問を信じ過ぎる人には、いゝモットーだ。や、話し過ぎて失敬した。見舞が却つて亢奮させる結果にはならなかつたか知らぬ。大丈夫かね。」

病牀の人「あ、大丈夫だ。」

見舞の人「ぢや、また來るよ。全く自然に任せた心でゐたまへよ。そして、もう直新年だから、病牀新年の句でも案ずるだね。」

病牀の人「ありがたう。君もめでたく新年を迎へたまへ。」

見舞の人「ありがたう、ぢや失敬。」

（藤村作）*

*國文學者
文學博士
東京帝國大學教授

女子新讀本　卷九　終

大正十五年七月十五日印刷
大正十五年七月十日發行
大正十五年十月八日訂正再版印刷
大正十五年十月十二日訂正再版發行

女子新讀本

定價
卷一、二、三、四各金四拾貳錢
卷五、六、七、八各金參拾八錢
卷九、十　各金參拾七錢

昭和三年度臨時
定價
卷一、二、三、四　金七拾錢
卷五、六、七、八　金六拾參錢
卷九、十　金六拾壹錢

著者　久松潛一

發行者　東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地　佐藤正叟

印刷者　東京市京橋區弓町二十五番地　高橋郁

（三協印刷株式會社印刷）

發行所　東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地　至文堂
振替口座東京二九五〇七番　電話青山（長）三五四六番　四三四三番

中央教科書協會
不許複製

弊堂發行の教科書は供給差支無き樣常に澤山製本出來準備致して居ますから若し貴地書店に品切れ等にて御差支の節は何卒弊堂へ直接御注文下さい直に御送り申上げます

玉文堂